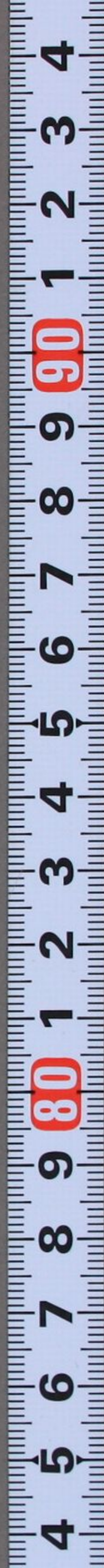
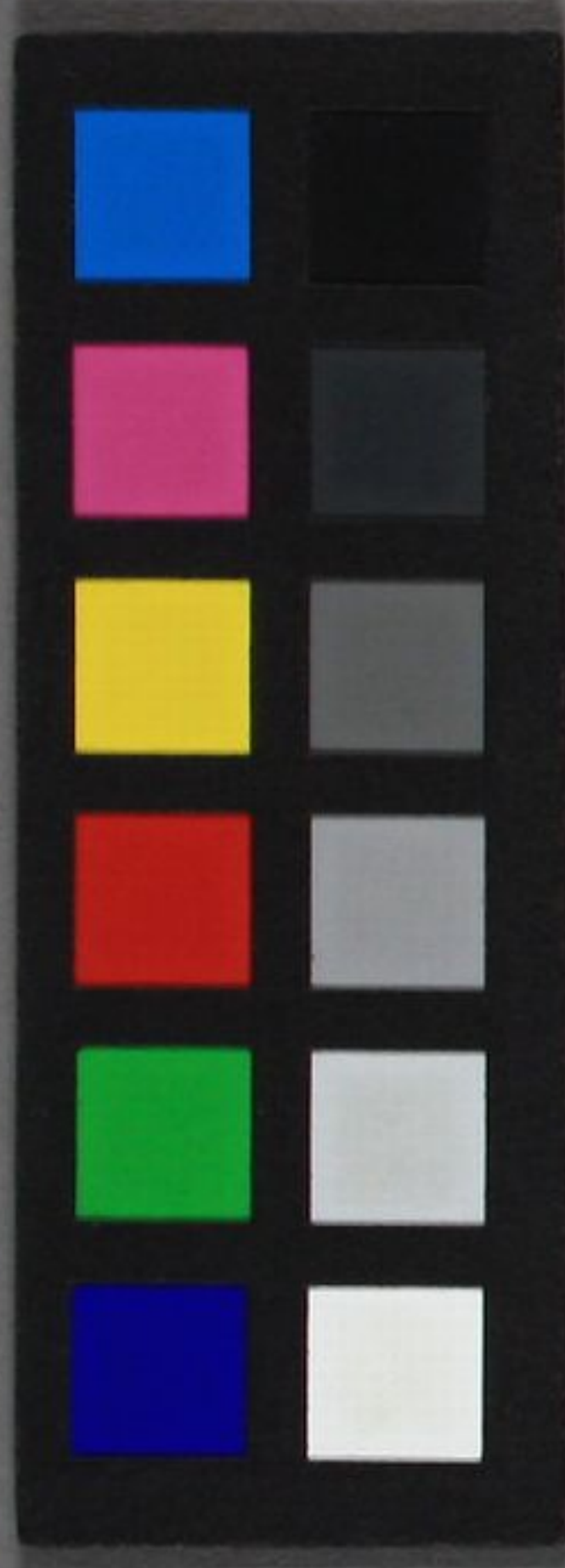
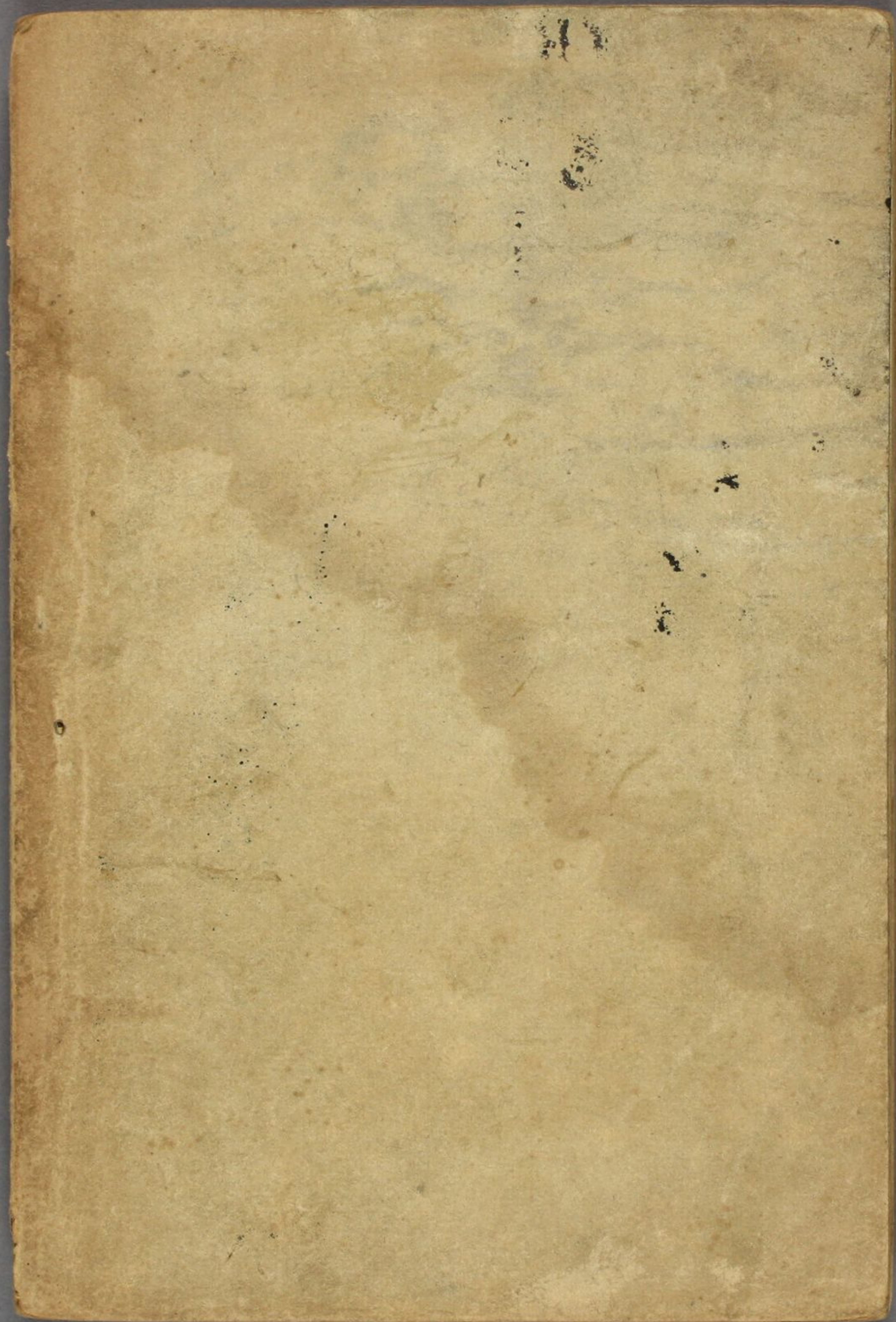


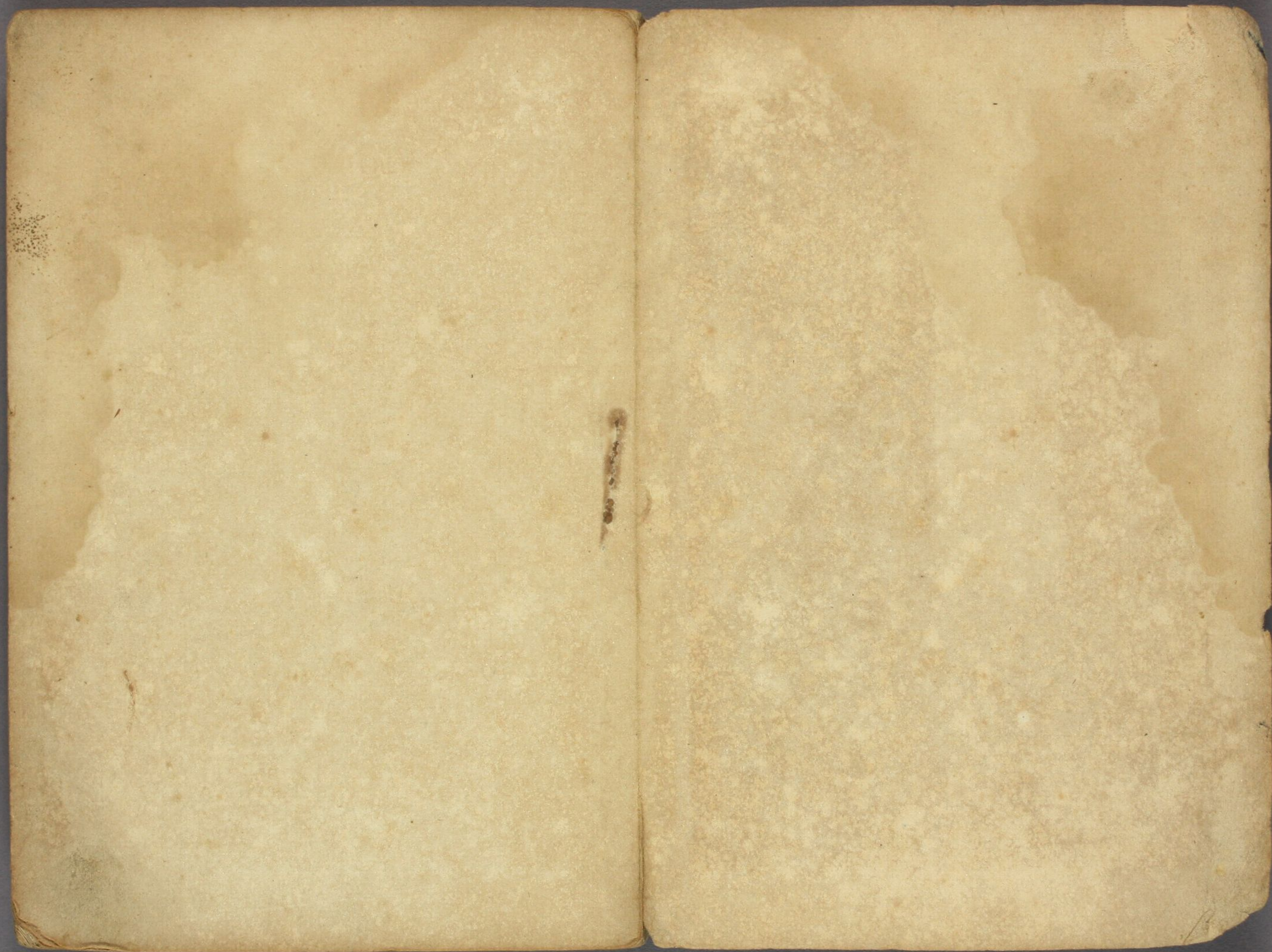
天然の聲

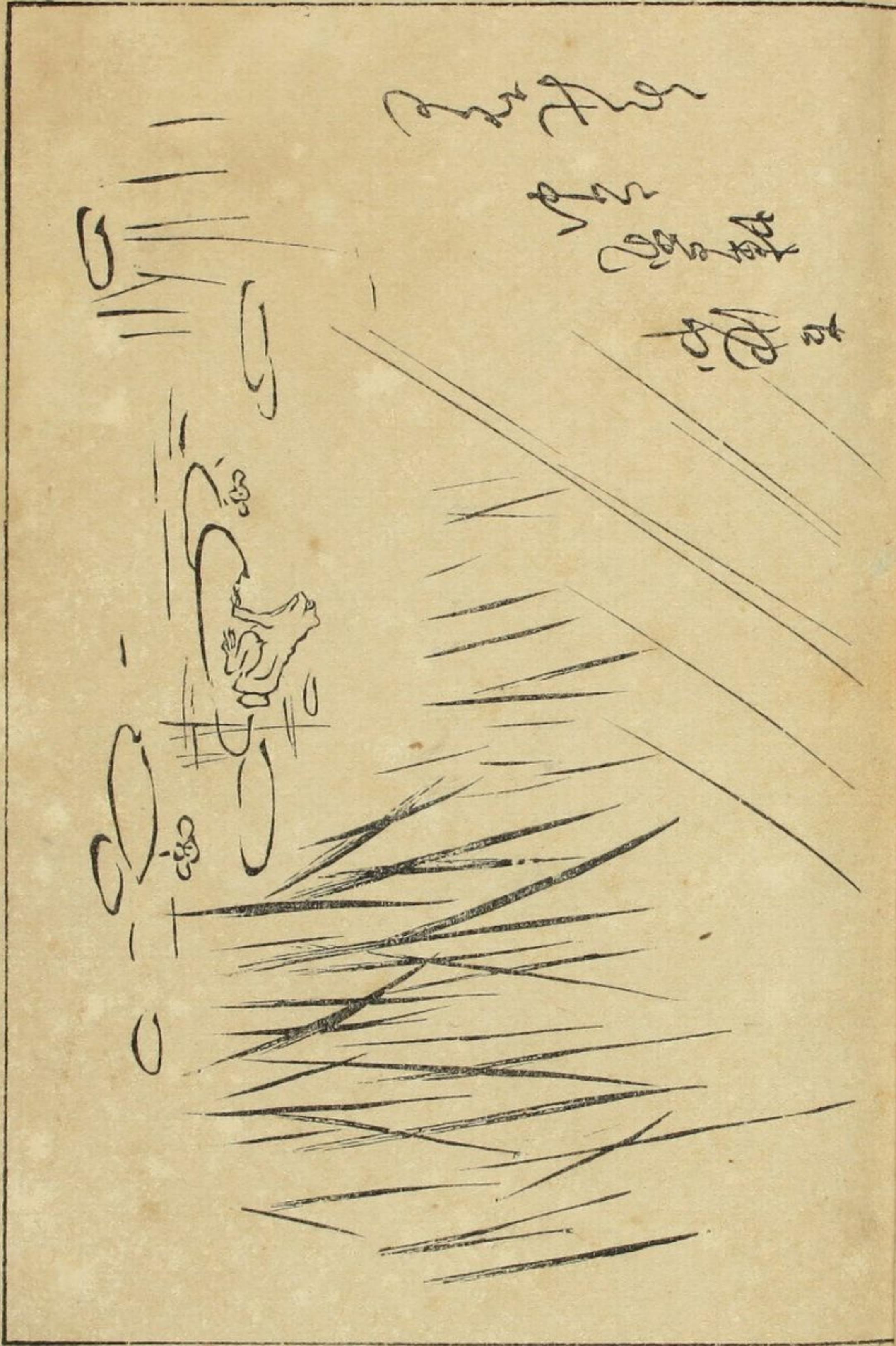
文學同志會出版











Handwritten text, possibly a signature or name, written in cursive script.

Handwritten text, possibly a name or title, written in cursive script.

Handwritten text, possibly a name or title, written in cursive script.



蟲の音の

掃かれて遠し

寺の庭

也
有

花ならば

さぐりても見ん

今日の月

望 一

はしがき

此編収むる所、紀行あり、隨筆あり、新體詩あり、日記あり。紀行に配するに詩歌散文を以てせるもの、蓋し一定の律あるにあらず。余もこ烟霞の癖あり、名迹勝區を経る毎に、必ず之を訪ひ、古を探り今を尋ね、乃ち之を文字に留むるもの、一二にして足らず、筐底常に蠹魚の地をつくる。おれ等固より兎園の文字、思淺く筆短かく、見る

に堪へさらんこす。さはれ今之を編せるものは、花前月下舊遊を憶ふ毎に、天地の聲轉た心耳に響き、忘れんこ欲して忘るゝ能はざるものあればなり。

明治庚子の歲端午の後五日

江山誌す

天然の聲目次

長夜獨嘯	一
雨奇録	六
藤田東湖	二
筑波のみね	七
小松寺考	二五
かたみの袖	三〇
王照君	三二
枕山餘録	三六
琴の音	四一
洪水	四三

學問の眞味	四八
鹿島紀行	五一
雨蕭々	五九
朧月夜	六六
藤江亞山氏を輓す	七〇
房總遊記	七二
井筒の水	九七
みなれさを	一〇〇
遊五浦記	一〇三
戈まくら	一〇五
かとで	一一〇
坐頭石	一一三

其一	一一三
其二	一一五
青鞋のつゝれ	一二一
雨中の一隊	一二一
小金の茸狩	一二三
花笠日記	一二七
落葉集	一三二
土筆	一三二
塩焚く海人	一三四
樂天地	一三六
晃山紀勝	一三八
春晚	一四五

残んの月影	一四七
精神の修養	一五二
函山一夜	一五六
旅づと漫録	一七〇
鈴の音	一七五
關西めぐり	一七八
山家の起き臥し	一八六
春晚の釣遊	一八六
漁火	一八六
雨の夜	一八七
月影	一八八
軒の玉水	一八九

四

薪とり	一九一
歳暮の感慨	一九三
會心の詩歌	一九六

天然の聲 目次終

敏一字是爲學之法而爲治之
要亦莫若焉天下可學可爲之
務如此其廣如彼其大故學與
治皆不可以不敏彼終身干官
而因仍無功者坐其勤力不敏
十常八九可不警乎

(佐久間象山)

天然の聲

鈴木五山著

長夜獨嘯

東京人が一種下界に流通する腐敗空氣を吸ふや久し。庶幾くはリン
デの方法を倣ひ來りて、富嶽絶巔千古清淑の空氣を液化し、一掬の
清味をして俗人の間に吸呼せしむる一再ならしめんかな。

上野の鐘聲陰に響いて、戸々の店頭火を移すの黄昏時、試みに街
上に立つて、行き、歸り、騎し、走り、驅り、歩するの人士を看取せよ。
十人十色、心の同じからざる面の如し。偽善家は晏子の御と笑語を

二
交へ、美人老紳士と伍し來る。書生肩を怒らし、車夫犬を呵す。此處しばらくは現出する浮世の走馬燈。人みな影法師たらば則ち止む、苟も國家を形成するの分子たらば、國民の氣力の己れに繋るべきとを自覺して可なり。

教育の普及叫ばれて以來、知識の注入に忙はしく、一にも讀書、二にも讀書、人は皆讀書子となりて、文字に溺れ偏説に泥み、一知半解直ちに出て、社會に雄飛するの資を得たりと爲す。甚たしいかな此輩者流の世を惑すや。嘗て渾然たる理想を文字以外に求めしか、曾て豁然たる所信を悟入し得しか。眼孔紙背に徹するは常人の能く爲し得ざる所、少くとも書を讀んで瞑目沈思。一篇の精髓を玩味するの消化力あるを要するなり。

今の人能く言ふ。然れども能く言ふが爲めに未だ能く行ふを保せず。況んや言行は互に相馳騫し、其心事の非なるを掩はんと欲して故らに口を極めて邊幅を修むる者、社會往々之を輩出す。豈に喜ぶべきの現象ならんや。嗟躬行實踐是れ將に吾人日常の警語に非ず耶。

朝に自惚學者の偏説を聞かぢりて夕に頑老に向て之を説き、昨某大家の所論を今教會の席に擔ぎ出して能く其口吻を擬し、以て自ら得々然たり。聽く者嘆賞して已まず、以て偉と爲す。是れ之を口耳四寸の學とは云ふ。世に此等の鼠輩が充つるに至らば其れ邦家を奈何せん。

四
『幾經艱難志始堅』南洲の壯語人を教ふるや深し。一片稜々たる氣骨も、艱難に遭ふと重なれば、張りつめし志氣も弛み易さが常なるに、幾たびか艱難に逢ひて心神の練磨を遂げ、水に漉し火に煉り、風雨に曝らし劔戟を経て後始めて志を堅うすと、英雄の用意斯の如きもある可し。

塔影森に黒んで石階人聲を絶つの半夜、獨り愛宕山頭に立つて四邊を願望す。月光空間に冴えて斗牛頻りに北に流れ、百萬の人家夜烟の間に眠りて、風に閃めく無數の燈火は宛ら炎附寒離の人情と反映して、俗界の裏面を描き出しぬ。嗚呼黃茅白葦見渡す限り果てなかりし武藏野の昔より、今を見れば將た何とかいふべき。上下茫々四百載蒼穹の星影落ちて人生幾變遷ぞ。榮枯古今を鎖し、其浮沈を歸

一にす。古人亦た此の月を見る、今人またこの月を見る。其間に在りて經營し活動し人生の本務を盡すに是れ銳意なる者ろも幾人かある。芝浦のこなたより深川のかなたに眼を辿らせし時の余は、無限の感慨に打たれず立多時。折しも怪しき鳥聲天邊を掠め上野の方に飛びぬ。帳然長風に一嘯して下る。

科頭築居長松下、

白眼見他世上人。(王維)



雨奇録

日夕紅塵の巷に來往して、半ば腐蝕せられし吟骨を、いでや黒風白雨に曝さばやと、茲に五橋春坡江山の三人、議立るに成る。

しきりにふり灑ぐ雨は、十一月廿二日の夜を罩めて、飯田町の一角より鐵車に乗る。四谷墜道にかゝる折は、閃々たる百萬の燈火は、宛がら百萬の亡者が地獄の谷にさまよふ如く、新宿より一人下り、二人下り、室内寂として、一方に憑れる查公の卷蕘の烟のみぞ立下る。日野にて下車し、街道を暗きに辿りて藪を度れば、前路愈かに指す八王子の驛、驛を過ぐれば、雨はさながら砒の如く膚を刺し、郊外微かに機聲を聴く。あはれ殘燈影暗き破壁の下、蕭然たる雨聲を數へつゝ、獨り征夫が衣を織るの新婦が胸中やいかに。

江山連りに足を艱み、一歩寸進遅々として杖に縋り、辛くも高尾山

麓淺川村といふに着く。杉の木立物凄き熊野神祠の廡に雨を凌ぎ、

一夜の宿りを祈申しぬ。さるにても寒氣烈しければ、手足凍れて人心地もなく、深山黑夜龕前に立盡せば、颯々たる松籟已に死して、社頭の鼯鼠のみ得たり顔に人の臉を掠む。天地聲なく人寰亦た遠し。夢か現か、身は遠く仙界に入らんとすれば、生憎や針もつ風は鏃の如く雨を飛ばし、破簾颯とざわめけば、今は絶體絶命と、三人は喪家の犬の如く、祠側の小學校の門を叩きて、哀れなる由を告ぐるに、眞夜中過ぎたればとて、衾中の先生は冷然として取りも合はず。半餉時も泣かん許りに佇みながら、慄へる齒牙を辛くも締めて、廊下の一隅を懇願し、冷たき板敷に纔に濡れたる身を横たふ。三人始め露營の覺悟なりしも、斯く迄とは思ひ掛けねば、日來の好奇心も是に至てあはや滅却しぬ。

一二分まどろむかと思れば、怪しき夢に忽ち寢回る音して、君も寢られぬか僕もと、慄へながら語り合ひ、終宵暁を交へず。いつら徹夜せんと五橋いへば、うれよからんと三人鼎坐をなし、燭を秉て手を翳し、紙を展べ氷れる水を呼吸にて温め其困難せる景を寫し、腹までくるしき句を敲きぬ。

漸くにして夜もほのくと明くる頃、見ればあたりは一面の銀世界とぞなれる。夜來の寒も想はれて、更に面白き雪の高尾の峯ついで。里の雞も鳴きぬ、朝げの烟りも立ちぬ、夜は愈明けはなれたり。

今はとて再び草鞋の緒を結べば、雪は尙ほ歇まねど、峯のをちこちは只白さが中に美しき紅葉のまじれるが松間の雪に映りて、雪も色ある奇觀は何にかたとへん。古來文人墨士多し、未だ雪中の紅葉を寫したる者ありやなしや。余等の此遊、實に奇中の奇と謂ふべし。

かくて登山は見合すこととなり、淺川の宿を出で、一商估に入り火を乞へば、夫婦余等を見て、ろは難義ならんいざとて親切にいたはり呉れ、楳火を折り添へ、澁茶を汲み、宛がら旅より歸れる愛兒を見るが如し。昨夜の村夫子先生と對比して佛魔の思無からんや。

雪は再び雨と變じ、余等は再び八王子に回る。日野までは例の鐵車を驅る。日野の崖下に煉瓦造の稻荷祠あり。さて、文明なる正一位様かなど、只管驚嘆し、呆然たる許りにて、參拜せで過ぎしぞ、吳々も遺憾なりし。是より日野の渡に至る多摩の清流は蜘蛛手に分れ湍となり、瀬となる。長汀白沙、茅屋の隠見する者二三。遠く網うつ簑翁を見れば、勇しき獵夫の斑雪の中に佇むあり。詩神悠渺として畫中の人となる。春坡切りに天地の活畫を讚して已まず。

風は蕭々として易水寒し。一蓬の短棹横さに玉江を渡れば、意氣頓

に軒昂、雄々落々斗牛を壓するの慨あり。たどへ鞅裂け裳破るゝも、
いつかなひるまぬ壯士の鐵腸、風も雨も惱ましあぐみてか、さしも
篠なす雨脚の逃足見ゆれば、折ころとて野となく畑となく勇往直進
更に一番の銳氣を鼓して立川に出づ。

午下西より來れる鐵車に搭すれば、足痛に惱まされし江山の流石に
元氣つけるもをかしく、互に語らひつゝ、一夜の苦行に文覺を氣取
りし三人は、熊野の御社を遙かに伏し拜み、得意の悟り顔にて歸京
しぬ。

湖光激瀾晴更好、

山色空濛雨亦奇。



藤田東湖

月黒く星稀に、四隣人定て萬籟寂たるの半夜、獨り郊外に行吟す。
萬感交々胸裡に徂徠し、情禁すべからず。瞑目沈思すれば、古今興
亡成敗の迹、歴然として眼中に在り。嗚呼古來幾多の英雄豪傑、拔
山蓋世の才略を抱持し、傲然一世に馳聘せし壯圖を見ては、何人
か蹶然として起たざらんや。其成否の如きは固より天に在るのみ。
誰か謂ふ成敗を以て直ちに人才を律す可しと。
胸中自ら經世の略を懷き、難世に處して政務に參預し、國君を輔け
て社會の正義を率ゐ、出ては獻替匡救の任を全うし、處ては人心刷
新の實を得、舉措進退一に正義に由らずんばあらず。藤田東湖の如
きも亦一偉傑なりと言はざる可らず。余が常に私淑する所以の者、
亦た此に在つて存するなり。

藤田東湖は水戸の一布衣のみ。彼が父幽谷幼にして博學、氣節あるの故を以て、閭閻より擢でられ、彰考館總裁に歴任す。頗る事に盡す者多し。其東湖を生みしは實に文化三年なりき。

東湖名は彪、字は斌卿誠之進と稱す。東湖は其號なり。幼にして穎達甚だ武術を好み、未だ讀書を好まず。弱冠に至て即ち大に悟る所あり、奮然志を樹て、孜々として文學及武術を學び、夙夜懈らず。學問専ら實用を尊び、曲學阿世の徒を見ると蛇蝎の如く、太平日久しく士氣の銷沈せるを慨き、大に正義を發揮せんことに勤めたり。曰く是れ先人の志なりと。常に楠父子及文天祥の人と爲りを慕ひ、誓て國恩に報いんと欲す。會々父幽谷死するに及んで、其祿を襲ひ、彰考館編修に任す。

哀公の病篤きや、東湖其同志數輩と死を決して南上し、大に當路者に説き、遂に景山公封を襲ぐに至る。復た益、信任せられ、常に藩政を釐革し、大に匡濟の策を講せり。

勤王攘夷は彼が心肝を貫ける一道の精髓にてありき。蓋し當時は徳川の下流漸く濁り、強弩の末勢復た魯縞を穿つ能はず。柳營の措置皆宜きを失ひ、天下の志士皆陰に泣く。東湖は此間に在て社會が如何に腐敗したりしかを早く已に洞見せり。故に事に臨んで愛國の精神を鼓舞せしめ、國威の根底を鞏固ならしむる事は彼が畢生の事業なりしなり。所謂入て廊廟の器となり、出ては干城の具となりしも、惜い哉屢ば群小の讒に遇ひて、其驥足を伸す能はず。其爲す所幕府の忌諱する所となり、遂に烈公の幽屏せらるゝや、彼も共に、捕獲幽囚の厄に遇ひぬ。幽囚の厄に遇ふも、彼が至誠の舌は、猶ほ時事を慨き世を警醒する事を已めず。『死爲忠義鬼、極天護皇基』と叫びぬ

其後彼は安政二年遂に震死せり。

東湖は實に醇乎たる血誠の男子なり。血誠以外に東湖あらず。東湖の動く所は是れ血誠の發揮する所、屹々として軀を忘れて力を經世に效し、管に君に仕へて輔理承化の功あるのみならず、社會に貽すに一の純善純美なる活精神所謂國民の大和魂なるものを以てしたるに至ては、社會の竟に一日も忘る可らざる者にして、以て彼が性情を風物すべく、品格を想見すべし。あゝ『苟明大義正人心、皇道奚患不興起、斯心奮發誓神明、古人有云斃而止』數句是れ豈に彼が最良の自叙傳に非ずや。

彼が常に交友する所、多くは當代の志士なり。横井小楠、佐久間象山、梅江田信義、西郷南洲等、皆親しく議論を上下し、形勢を辨難せし者、想ふに言論の間、踔厲風發、氣焰萬丈、方さに天に冲す

る者ありしならん。東湖南洲を見て、『他日我が志を繼ぐ者は此少年のみ』と言ひ、南洲も東湖を評して、『眞に畏るべき者は東湖一人のみ』と言ひし如き、由來肝膽相照らす、英傑各々見る所あり、遂に此言を爲す。果して後年南洲の雄略一世を震はせし所以の者、其れ偶然ならんや。

東湖亦常に飲を嗜む、花前月下、唯一の友は短瓢なしなり。鯨飲萬斛、醒めては則ち瓢兮を歌ひ、酔ふては則ち脰を曲げて眠る。復た餘事なし。されど慷慨の氣胸中に充つる時は、慨然として痛罵一番悲壯淋漓滿腔の義膽を樽俎雜陳の間に放ちしといふ。

嗟呼武家政治の綱維漸く弛み、王政復古の機運將さに開かれんとするに際し、東湖の如きは、實に其東道の主人たりしなり。兎に角海内幾萬の眼をして、世に慷慨攘夷家の東湖あるを知らしめ、餘風の

及ぶ所、必ず其舉動を聞て神州の正氣を振はずに足る者ありしとせば、東湖も亦曠世の偉人たるに愧ちずと謂ふ可し。

烈婦無二心、

丈夫有奇骨、

獅子一吼時、

百獸腦破裂。

(渡邊無邊)



筑波のみね

余等は今十三峠にかゝりぬ。坂路羊腸、足痛むこと甚たし。一歩々々相扶けて、稍々四望豁然たる岡につく。來路を顧みれば、迨々として遠く谷底にあるかと疑ふ。遠村近落悉く目睫の中に入り、更に仰げば、烟鬢霧髻、澹碧空に浮び、突兀として馬耳の雙峰を現出す。流石に氣も勇まれて、塵外を吹く山上の清風に浴しつゝ、佇立すると多時。

是より筑波町への路は左まで峻ならねば衆みな鼓噪して進む。路より左し山中に分け入る處に白瀧あり。只見る一條の素練萬顆の珠玉を綴りて、碧崖の間に懸る。水清冽にして境尤も幽邃、松韻長なへに天外の響を傳へ、鳥聲罕に深山の寂を破る、かたへに垢籬小屋あり。三界の火宅を逃れて六根の清淨を企願する者、來りてこゝに文

覺を學ぶとかや。石磴を上りて白瀧神社あり。

こゝを去りて山の中腹をめぐれば筑波町なり。江戸屋といふに投宿す。時に細雨雲として至り、仰きみれば一堆の雲烟濛々として翠微を繞り、見る間に脚下を掠めて山麓をも包む。余等もと登山の覺悟なりしに、圖らず今山腹に於て此山雨に遮ぎられ、遺憾いふ許りなし。相顧みて呷くのみ。己にして少しく小歇みの氣色見ゆれば、衆眉や、開き、これならばと互に相勵まし村雨の露もまだひぬ榎の葉をば雙手にはらひつゝ、先づ筑波神社にまうづ。こは陰陽二神を合祀する處、一拜し了て陽峯に上る。

上るに従ひ石益々多く、嶮愈々加はる。石徑を躋り、蒙茸を披き、曲折する處龍驤に愕き、頓挫する處虎嘯を呵す。右に絶れば左に躡き一步は樹根に於てし三步は巉崑に於てす。見上ぐれば山更に峻く

して路窄まり、雲烟蓬蘼として谷を出で來れば山風颯爾として斜めに吹き、衣袂悉く白く、足を愼まざれば則ち墜る。豈に雲烟過眼視するの違あらんや。

山骨の彎曲する處、一道の溪泉石罅の間より迸出するあり。琤々として環珮の響きに似たり。所謂美なの川にして古へより有名の歌枕なり。按ずるに美なの川は峯の川の義か。陽成院の御製を碑に刻せり。

つくばねの峯より落つるみな川の

戀ぞつもりて淵となりぬる。

流れて櫻川となる。水極めて清澄掬すべし。衆舌を鼓して飲む。傍へに茅舎あり、山中の奇物を嚮ぐ。復た上ると二町にして地少しく平坦なり。こゝは則ち陰陽二峯の分るところ、一亭あり、題して

依雲亭といふ。題字は往年藤田小四郎兵を擧げて筑波に據るの日、手つからし首を以て鑄する所なりといふ。小憩して名物の女夫餅めづこを食ふ。時に雨益々激しく、杉履淋漓絞るにあまる。更に石壁を鎖にて攀ち、青逕を辿り盡すに、飄飄乎として宛も白雲に駕して帝郷に入るが如し。未だ數百歩ならざるに早くも巔に達す。

乃ち男體權現にまうづ。石欄を繰りて巖角に立てば、峭壁及の如く、下不測に臨めり。ろも陽峯は海面を抜くと實に二千八百尺、あゝ余等は今まろの絶巔の一角に立て割然一嘯す。其快知るべきなり。只怨むらくは幾重の濃霧四邊を置めて、漠々又漠漠關八州の壯觀も空しく濛々の裡に鎖されりぬるを。

筑波の歌枕に入りしや古く、日本武尊の歌に、

にひはりつくばをこえて、幾夜かねつる。

高橋虫鷹のうたに

男の神に雲たちのぼり時雨ふる、

ぬれとほるとも君かへらめや。

古今集東歌のうち常陸歌

筑波根のみねのみぢ葉おちつもり、

知るもしらぬもなべてかなしも。

又能因法師歌あり

君か代は白雪かゝるつくばねの、

みねのつゝおの海となるまで。

新古今源重之、

つくば山葉山蕃山しづしげれとど、

思ひいるにはさはらざりけり。

は人口に膾炙する者、其他古來文士の品題に上る者尤も多し。

二十二

午後五時といふに、更に陰峯に上る。陽峰を距ると六町、峻峭は却つて之に過ぎたり。亦た女體權現を安す。時適滴晡に近ければ、名残をしき勝蹟も見果てい、只管道のみいろぐ。こたびは下り道なれど凸凹一ならず、頗る行歩に艱みぬ。加ふるに煙嵐の徂徠すると急に、崎嶇たる石徑綫の如く、山鳥名無く時に樹を繞つて鳴く。その物すごさといはん方無し、又た聞く山中には獼猴多く棲めりと。

されば余等はしきりに警めて棧道を下り、迷濛の中に在て相顧みて失するを畏るゝなり。碧蘿蒼蘚一簇の藍を湛へて、斜に崑角を露はし、偃蹇僂僂巉然として相銜み、嶽然として相累なる。相累るの處、上より頽れんと欲するが如く、相銜むの處、人を嚙まんと欲するに

似たり。一俯一仰悚然として轉た足の震ふを覺えず。山中の奇峭此に至て極る。

或は鉄鎖に攀ち、或は雲梯に駕し、胎内潜くわいは黒闇澹たるの巖窟纒に身を屈して蒲伏するの處なり。辨慶七反なつもとは兩崖聳立、上に一大磐石を支ふるの石門にして、仰ぐ毎に覺えず毛髮悚立せずんばあらざるなり。傳へ云ふ、こゝには辨慶の巨鐘ありしが、往年之を撤去せりと其他船玉社の如き、大鈎錨の如き、其峻絶峭絶なるに至ては、意氣悠然神魂爲めに飛ばんと欲す。

嗚呼、余等白雲を出て、更に白雲に入り、迷濛を上りて復た迷濛に下る。千里尺寸の大觀を見ずと雖も、而も其間の奇山峻谷を遍く跋涉す。清は挹む可く、奇は駭く可く、秀は掬す可し。山靈の淑氣に鼓吹せらるゝもの豈に少小ならんや。

二十三

衣の濕ふこと水に浸るが如く、苦悶言ふ可ならず。時に暮色荒涼、
墜葉雨に打たれて簌々として聲あるのみ、四顧寂寥たり。復た下る
こと數町、遂に筑波町に達す。

縹渺列僊都、

玲瓏群玉園、

峯腰一片雲、

散爲千山雨。

(管茶山)



小松寺考

明治二十九のとし二月十八日、同窓の友と小松寺を訪ふ。此日天氣
ことに麗らかにして、こちふく風のいと心地よく、日影の高くなる
につけ、綠なす老松のかげ、谷氷のとけて流る、汀かきはまた春の始めと
いへど休らひたげの涼しさなり。やがて安戸橋より西し、幾多の坂
路を上りつ下りつ、或は芝生の原に出で、或は小川の堤に沿ひ、小
松村に出つ。路を老媪に問ひ西に行くと十數町、遂に小松寺の麓に
着きぬ。

小松寺は常陸の東茨城郡上入野村字小松に在りて、元全村小松寺の
境内にして山の半腹に在り。

小松寺舊記に云、平氏没落の後、一族平貞能(筑後守)重盛の分
骨及び守護佛觀音を負て本州に來り、遺骨を山上に葬り、一精

舎を創め相應院と云ふ。即ち小松寺是なり。貞能薙髮して僧となり、小松房といふ。後行方郡若梅村に萬福寺を建立し、閑居以て終る。同寺の觀音は即彼の守護佛なりと。或云建久中一尼あり、京師より來る。此地に小松内府の墓碣を設け、其の冥福を祈り、依て又一寺を創し相應院と號す。應永三丙子年僧宥尊更に堂宇を經營し、小松寺と號すと。若し此説にして眞ならしめば、碑は蓋し當時建設する所ならむ。(志料國誌)按するに、貞能重盛の墓を發き、遺骨を收めて高野山に藏す、(源平盛衰記平家物語)玉海元暦元年甲辰二月十九日記に云、平資盛貞能等豊後土人の爲めに擒にせらる。未だ考ふる所なしと雖も、全く棄つべからざるに似たり。貞能枯骨を負ひて關東に來りたること、山陽が外史にも見えたり。

今は寺房最も敗頽し、檐端の丹壁朱柱などは、半ば朽ちて、昔しの名殘を忍ぶのみ。四面に風の吹き入るも、之を防ぐ杉の局だになく、蜘蛛は長なへに網を張れども法の燈だに照らす夜半は稀なるにやと、坐るに古、英雄の遠蹟を想ひやりて、今を吊うふものは先づ暗涙なりけり。

傍への堂に重盛の像あり。又貞能の位牌あり。堂前に巨石の横はれるあり。長三間幅五尺許もありなん。有志者の醜金より成れる靈墳保存の碑石なれど、資本の薄ければにや、今はその儘に横たへられつと。

其の所謂重盛の墓なる者は、堂後の半腹にあり。古色蒼然たる一個の卵塔にして、半ば苔に埋もれたるかたへに木碑の面には、『故正三位小松内大臣重盛君鎮靈』と讀まれぬるぞかしこきや。嗚呼忠孝比

ひなき臣子の龜鑑ぞと、千載の後猶ほ青史を照らしつゝある小松内府の枯骨は、此一片冷々たる苔石の下にあるかと、低思黙想拜一拜して遂に山を登る。峽路羊腸わづかに藤蔓にすがりて疲脚を移すのみ。漸く頂にのげれば近遠の諸村落を一目に萃め、谷底の喬松古杉は悉く脚下に踐む可し。衆おもはず快と喚ぶ。

時はや一時に近ければ焦れくし行厨を打披き、互に語らひつゝ、飽まゝで美食しぬ。放吟すると少時、一時廿五分、復た山を下りて、小松村を辭し、こたびは途を成澤にとり、飯富、渡里、袴塚を経て、谷中墓所に入り、故寺門貞君の墓を吊らひ、有爲の才を抱いて獨り君が此世を去りし不幸を悲しみ、低回去るに忍びず。暮林に還るの晚鴉に送られて、黄昏の色は次第に迫り、影うすき下弦の月はひとり澄みぬ。

乃翁凶熯逐年新、
家國存亡係一身、
祈死就安君自得、
欲將天子付何人。
(坂井虎山)



かたみの袖(一友の身の上を)

いつかはちかふ業とげて、 春のにしきをふる里の、
 母のゑがほにながめんと、 頼めしとやあだなりし。
 老曾まごの杜つとの風あらく、 つゆしもしげき若艸の、
 のふるもまたで枯れゆきし、 母のみもとぞしたはしき。
 むつきの頃よりはこくみし、 ろのみなさけに比べなば、
 かざしの玉もなにかせん、 月のひかりも數ならず。
 影さへうすきともし火の、 なごやが下しもに只ひとり、
 かたみの衣をとりいで、 思ひにあまる雫しずくかな。
 窓うつ雨のをやみして、 むかしの夢も冷やかに、

よるの衣をかたしけば、

袖のうつり香のこるなり。

無限哀情亂晚暉、
 廿年奉侍夢依稀、
 春衫灑盡千行淚、
 即是臨終分賜衣。
(高橋古溪)



王昭君

きのお都を立ちしより、
ろよぐ風だにおどろかれ、
ふりくらしたるさ夜時雨、
ぬれてやつる、旅ごろも。

吾おもひねの手枕に、
ねられぬ夜半もあるものを、
しるやしらすや九重の、
みはしの雲の深くして。

ありし昔の玉の床、

世のさかしらのひが人は、

うれしき夢のあとどめて、
かひなきこと、知りながら、
たつねわびしも幾らたび。

黄金こがねの光りにまじろぎて、

あらぬ面影うつしゝを、
とくよしもなき埋れ木は。

あせゆく色はをしまねど、

絶えぬ思ひをいかにせん、
いくたびおもひかへしても、
またくりかへすをだまさを。

雲井の雁よなさけあらば、
あはれと思へしはしだに、
故郷とほくはなれきて、
ゑびすの國へ行くわれを。

あしたのあらし夜半の月、
また訪ふ人もなきまゝに、
かぎり知らぬ真砂はら、
なきくらしたる浮寐鳥。

露にやつれし枯れ葦の、
よろの見る目やいかならん、
雲に消えゆく夕煙り、

心ぼろげにのぼるかな

雪横秦嶺家何在、
雪擁藍關馬不前。
(韓退之)



枕山餘錄

三十六

明治二十年八月七日雨。蚤起。與五橋溪村二子。衝雨而發。自杉山踰鐵橋。抵青柳驛。訪小沼氏。驛西得一碑于柳樹下。題青柳夜雨四字。源烈公所建。渡珂水。疇昔霖霖。河身頓肥。水勢迅激。恰如發矢。午牌抵谷中。訪軍司氏。氏供茗殮。以待詣。廿三夜尊。堂後爲常盤原。乃展藤田東湖墓。薦藻而去。經袴塚。東折。至長者墟。相傳源義家東征之日。宿長者家。長者供千人饌。以饗焉。義家慮佗日爲不可制之賊。乃屠其家而去。至今尙存土壘。地形東西延。南北蹙。前控平野。後枕珂江。居然爲險要之地。敗瓦銅甌。土人往々得之於土中。云。偶五橋就一民家。得古壺蓋。形類皿。古色沈鏽。頗爲異物。過飯富。度入野川。架橋名大橋。後有青嶂。前有蒼田。人家六七。隱見茂林密竹間。蓋一幅之畫趣也。抵那珂西。攀阪路。道右有城址。往昔那珂西氏所據處。自此岡阜陂陀。雲

脚低下。僅露翠巒於其上。比晡抵阿波山驛。宿大高氏家。夜置酒談舊。迨深更。乃寢。雨未歇。一燈光濕。影欲無。驛北有阿波山祠。

八日曇。發阿波山。過田塍間。紆餘曲折。路稍峻。抵岩船。四顧皆青壁。處處露頑石。下則水聲瀾々。若鳴珮環。詣岩船祠。流水清駛。松柏蒙翳其上。別自爲仙寰。祠側有石。貌酷類船。崇三尺。橫七尺而贏。長更加三之二焉。所謂岩船者。土人云。全山以岩船稱者。大小四十八。亦一奇矣。祠背得兜石。徑可九尺。頂爲凸字。形恰似兜鑿。所以名也。再還阿波山。途過高根村大山寺。置阿彌陀如來像。孩兒有疾。禱焉。則有驗。是以遠近賽者接踵云。時已過巳牌。更抵坏村。買舟渡珂水。昨雨漲溢。水勢激越。旋渦爲巴字狀。篙師三人。極力盪櫂。遂達前岸。下江戸村也。阪路上下。加之地質赤埴。動輒顛跌。抵靜村。詣靜祠。祀手力雄神。喬杉鬱乎天。遠眺之。宛然爲一高丘。會雨至。翠山潛容。遠村近落。斷續參差。乎烟靄間。真

三十七

活、圖、畫、矣、東、折、一、里、抵、瓜、連、真、福、寺、在、驛、東、樓、門、鐘、樓、多、皆、頽、破、有、僧、了、
譽、墓、及、水、戶、藩、故、執、政、山、野、邊、氏、塋、域、至、栗、原、渡、久、慈、川、過、河、合、磯、部、晡、
時、入、太、田、驛、西、有、丘、丘、上、有、碑、鐫、山、寺、晚、鐘、四、字、喬、松、參、天、地、尤、幽、寂、
亦、烈、公、所、撰、八、勝、之、一、也、離、此、數、百、武、抵、西、山、爲、水、戶、義、公、隱、栖、之、處、
檜、杉、蔚、然、衡、門、茅、屋、不、加、裝、飾、守、者、延、余、等、觀、焉、曰、心、字、池、曰、觀、月、臺、
曰、茶、寮、曰、玄、關、曰、書、齋、曰、櫻、曰、松、風、雅、之、可、喜、與、高、韻、之、可、慕、使、人、不、覺、
晷、移、于、嗟、西、山、公、之、高、風、天、下、人、誰、不、欽、慕、至、今、西、山、之、民、所、以、慕、德、篤、
義、者、亦、宜、矣、哉、時、已、日、暮、抵、桃、源、橋、夾、道、種、桃、蓋、公、之、遺、愛、橋、畔、有、西、
山、碑、源、賴、寬、所、撰、還、太、田、宿、家、兄、寓、居、

九、日、晴、太、田、東、崖、有、太、田、落、雁、碑、辰、碑、上、瑞、龍、山、全、山、皆、松、蒼、翠、滴、衣、
謁、水、戶、公、墳、域、自、威、公、至、烈、公、石、成、段、木、成、柵、墓、碣、皆、在、背、諸、公、
與、夫、人、同、兆、焉、畏、敬、不、覺、低、首、拜、跪、別、有、梅、里、先、生、墓、朱、之、瑜、墓、武、田

信、吉、墓、儲、君、庶、公、子、宗、族、妃、嬪、之、墓、皆、在、焉、經、西、宮、抵、幡、渡、里、川、食、頃、
達、真、弓、山、愈、峻、路、愈、急、一、步、一、喘、咽、渴、甚、加、之、初、不、齋、糧、至、是、腹、汨、汨、
而、告、飢、乃、少、憩、樹、下、斟、糖、醴、鼓、勇、而、上、見、江、幡、寒、水、坑、場、蓋、真、弓、山、
身、自、頂、至、腰、巖、寒、水、石、處、處、露、石、骨、遠、望、之、一、白、如、雪、得、一、華、表、爲、
真、弓、山、登、口、四、望、豁、朗、可、放、眸、于、十、里、外、矣、愈、登、樹、愈、多、遂、成、一、
蔚、林、境、自、寂、寥、都、絕、人、籟、宛、有、鳥、鳴、山、更、幽、之、想、林、中、有、真、弓、
祠、立、石、上、石、勢、危、仄、突、怒、偃、蹇、恰、若、狡、獍、攀、枝、猛、虎、嘯、谷、使、人、
怳、然、衆、魚、貫、而、下、達、大、久、保、取、捷、於、諏、訪、田、塍、之、間、起、伏、不、一、
崖、轉、路、廻、青、嶂、兀、坐、勢、欲、頽、下、攀、以、蕪、度、以、棧、風、來、谷、湧、水、露、石、出、不、
知、其、幾、十、變、化、其、間、人、家、蕭、疎、雞、犬、甚、稀、恰、如、一、幅、溪、山、秋、老、圖、中、余、謂、
豐、耶、馬、溪、山、陽、極、筆、誇、其、勝、想、亦、不、過、此、焉、耳、度、小、徇、窈、窕、崎、嶇、
愈、進、愈、嶮、隨、嶮、隨、奇、旣、山、瘦、谷、蹙、路、窮、而、得、洞、穴、矣、水、灑、然、迸、

出、掬、之、清、冷、熨、齒、卻、寒、沁、骨、夏、尚、如、秋、然、蓋、洞、不、詳、何、迹、高、數、尺、
深、百、數、十、步、照、炬、以、行、名、神、仙、洞、俗、稱、諏、訪、水、穴、傳、云、通、信、州、
諏、訪、洞、荒、唐、可、嗤、傍、有、水、神、祠、乃、回、踵、而、抵、下、孫、搭、鐵、車、還、水、
戶、時、已、昏、黑、晚、烟、如、帶、回、頭、則、新、月、一、痕、照、來、路、

四十

山重水複疑無路
柳暗花明又一村



琴の音

ほのかに洩るゝつま音の、
あはれゆかしき簾のうち、
誰が手なれにし東琴、
昔しのぶの音をさへに。

だえてはつゝく玉水の、
糸の流れもしめやかに、
心にひろむもの思ひ、
調べのろとにあふれつゝ。

今宵の月にあこがるゝ、
世のうかれ男はあるものを、

かたみに手に手むつびつゝ、
樂む女もあるものを。

あかぬながめをさりとは、

軒端の月もよろにして、

花の齡のたをやめが、

などうきふしをかなづらむ。



洪水

満々たる水勢は早や轟々と推寄せ來りて、四茫の田野一面に泥海と變じ、只彼處此處に數點の森蔭は、宛がら大洋に漂ふ沖つ鳥の如し。今日は雨止み風も斂まりたれど、水勢は更に退くべくもあらず。次第に水嵩まり來て、近邊の家財の蕩盡する者其數を知らず。猫犬の家畜さへ漂流するもありて、慘澹たる四邊の光景一種の殺氣を帯びて、彼方に流るゝは物置小屋か、此方へ浮び來れるは馬の屍體にもあらん。トウ〜と渦巻きかへす荒波は、余等が上れる岡の根を掠めて、今しも足元まで浸すかと疑はる。人の叫ぶ聲、水の流るゝ音凄まじくも又怖ろし。

遙かに見る、上流に方りて一點暗黒の漸次に流動し來れるものは、果して是れ何の怪物ぞ。衆は皆悚然として心膽に一種言ふ可からざ

る不快の念を生じぬ。蓋し斯る怪物は往々悲惨の傳令者なればなり。猶も瞳を放たで打守る。次第に近づくを見れば、黒點は一屋の漂へるものと顯はれぬ。激しき濁浪の中に浮きつ沈みつ。

ろが屋上には一個の小兒あり。頻りに手を藻掻きて、屋根に取付く様なるも、用捨なき荒波に蹴立てられつ。半は身心共に疲れし有様にて運命の保續者と頼める果敢なき草屋根と共に漂ひつゝ。

人々は之を見て思はず顔を掩ひぬ。あゝ人の將さに水火に焦溺せんとするを見ては、平常惡む所と雖も、誰か一片惻隱の情を發せざらん。

而かも此大波を蹴つて、憐むべき小兒を助けんと言出づる人はなし。敢て勇氣なきに非ざるなり。之を助けんと欲せば彼我兩ながら水魚の腹中に葬られんは眼前なれば。

人々は相顧みて凄愴たらざるはなし。

此一瞬、狂氣の如く來り來れる女あり。髮亂れ衣壞れ、足も手も常度を失ひたるが如く、震へる身をどツかと衆の前に投げかけ、聲を絞りにて救ひを求めぬ。憫れなる聲をふり絞りにて。

衆は皆一様に此女を打守りぬ。而も其何の意たるを知らず。女は心神の錯亂せる爲めか、語る言葉は少しも解せられざりき。されど河面に流れ去る家屋を指せるに由りて、死に臨みつゝある彼の憐れなる小兒の母なるを知りぬ。

人々は切なる同情の勇氣に鼓舞せられ、思はず躍れり。忽ち一個の壯漢は我救はんと鋭く呼んで、自ら挺んで、難に赴かんとす。彼は手早く衣服を抜棄て、今や跳び込まんとせしが、俄に心付きてか一條の繩索を用意せんとてひた走りに近き家に走りぬ。後とに彼女

はもどかしく、足を踏み摧きつゝ、壯者の來るを待詔び、只管我子を救はんを人々に泣て訴へぬ。されど見るく濁浪は彼の流れ去る家根をも埋め來りて、哀れ小兒は眼前に葬られんとす。危機一髪一轉瞬も徒らに失ふ可らず。彼女は心狂せり。大喝一聲、自ら水に臨んで投身し、人々の呆然と見とるゝ間に逆捲く浪を切て、一心不亂に泳ぎ去る。

されど水には熟れぬ女の身。はや十間も流れたらん頃は、漸く身も衰へ來て、屢水泡に埋められとせしが我子を援けん女の一念、流れくゝて今しも漂屋に着かんとす。此時遅く彼時早し。俄かに襲ひ來れる山なす浪は、容赦も無く此憐れなる母子を、家根諸共に埋めさりぬ。跡は凄まじく渦まき白波のみ。

あゝ長なへに吊ふ人なき水魚の腹中に葬られしか。

* * *

余は其後數日私用ありて堀口村を過りぬ。其日村民共は屍骸の漂着せるを發見せりとて罵り騒ぎけり。女の死體……其子と覺し者者と抱き合ひて……など語る言葉端なく余が耳に入りぬ。

あゝさてはと思ひ當りし余は、其後彼の事の思ひ出す毎に、今もうら寒き心地するなり。

學問の眞味

四十八

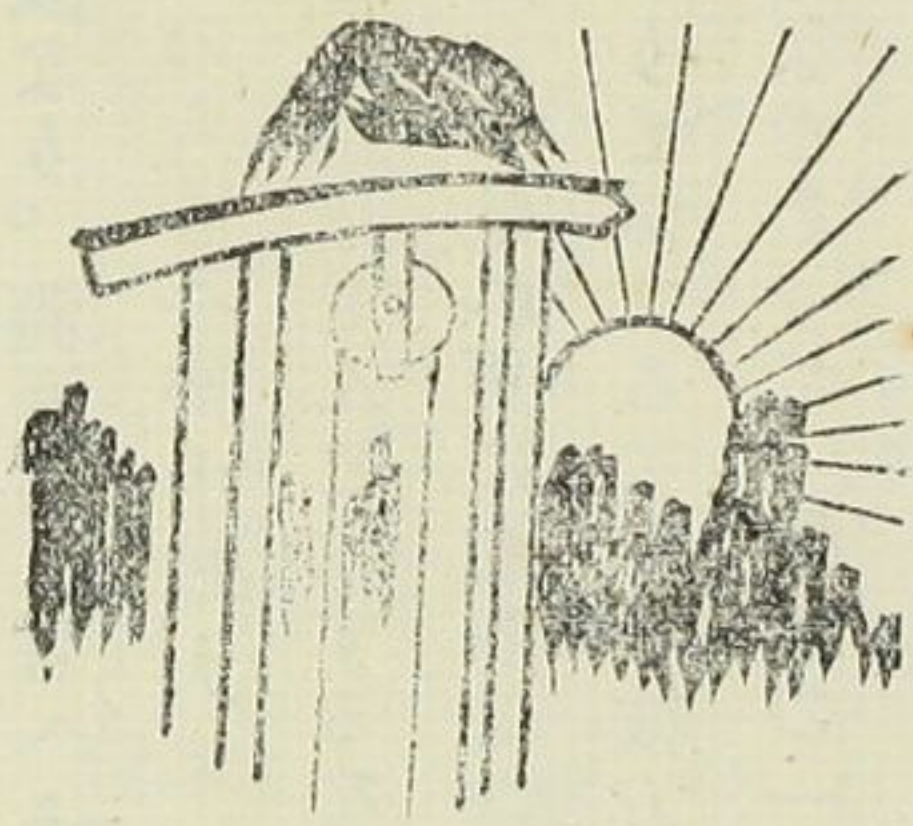
凡て學問なる者は、社會の事々物々は實に萬種の現象を呈して、複雑極まる者なる故、之を秩序的に配列したるものが即ち學問なり。されば何も學問ありて社會あるわけにてはなく、社會あつて始めて學問が生したるわけなり。然るに世人は往々誤解して學問てふものを一種崇高の者の如く考へ、成る可く俗より遠ざかり、通常の人に解らざるを以て學問なりと心得る人あれど、之れは大なる間違にして、所謂敬して遠ざけらるゝといふものにて、學問其者の精神より云ふも誠に不本意なる次第なり。世の學者先生達が遽かに自分の學問を振り立てゝも却て實用にはならず、社會より取除けにされ、彼れは學者の塵言ほこごなりと一言の下に葬らるゝは無理もなきことにて、學問其者が役に立たぬにはあらず、甘く理論と實際と

を調和するの能力を缺きたるが故なり。潤遜ジュンソン嘗て言へること有り、理屈のみを以て世に立たんとするの人は不幸中最大不幸なる人なりと。余は之を更に敷衍して社會に適用せんと欲するなり。即ち理論と實際とが相調和せざるの社會は、是れ更に進歩せざる、寂しき活氣なき、秋の野原の如きものなりと信するなり。彼方にも霜枯れの菊や、此方にも咲き残りの尾花などありて、學者の一團實業家の一團と個々別々になりて、互ひに睨み合ひをなし居る、實に面白からざる現象なり。

されば其理論と實際とを調和するは、社會を組成せる吾人の義務たらざる可からず。社會が幾多の學者を輩出するも、幾多の實業家を輩出するも、互に孤立するの日には、衝突するに終りて直接世の進歩を促すとは到底期す可からざるなり。

四十九

凡て學問を爲すにも之を學ひ、之を習ひ、之を活用してこそ始めて學問と言ふべけれ。古人が言ひし學は實用を貴ぶといふとも深意は蓋し此邊にあるものならん。所謂腐儒とは卓上書物のページを暗誦するの謂ひにて、一日も棚へ上げ置かば直ちに微をを生ずるの先生達なり。殊にペストガ流行する今日に於て、斯る腐敗物を打捨て置くは學問の衛生上極めて宜しからぬとなり。人々此點に注意せば庶幾くは謬ると少なからん。



鹿島紀行

明治丙申四月旬三日、曇。整旅裝。與家兄共發焉。至石崎。野草菁々。而林樹間點々見櫻花爛熳也。乃出津頭。備小舟渡澗沼。時風波漸烈。舟正動搖。飛沫濕衣袂。舟子操縱最力。已牌舟達海老澤。憩于富田亭。餐了。南行半里。過城ノ内村。從是原野茫茫。杳無限。遙認蟻馬。豆人蠢爾耳。到舟木新田。舟木某所開拓。某舊下館藩士。夙入慶應義塾修英學。明治五年奉職開拓廳。派遣濠洲清國等。十二年歸朝。遂辭職躬自從事開拓牧畜業云。過大戸村入松林。岐路東西。失路者數。余等或檢磁針。或卜石標。漸而着石八戸。乍細雨霏々而至。乃倉皇經秋山飯名達銚田寓居。時日已加未。疲甚。乃休憩。比哺釣于前川。

十四日雨。風雨激甚。申牌與從弟一傘衝雨。僦舟下銚田川。

柳邊蟹舍水邊樓。煙鎖茫茫。鼓浦頭。自覺風光勝晴景。一逢春雨下蘆洲。

浙々瀟々灑綠蘋。扁舟徐繫翠楊灣。誰知騷客多詞料。細雨斜風春尚深。既而舟達串挽。遂到高田。泊武田氏家。

十五日風雨。繙書史。與叔父爲唱和。高田之地。後負丘陵。前控北浦。隔水對鹿島郡。而漁村汀樹。歷落于渺茫模糊間。風景尤可愛。

似入宛然圖畫間。漁家半枕翠楊灣。雨餘春色尤堪愛。霞罩香洲十里山。

十六日風雨。午前讀書。午後天少開霽。乃與從弟等上後丘。相與優遊。薄暮泛舟清流。諷咏而還。

十里平湖靄晚霞。柳邊認得兩三家。詩人此際好詩料。花外垂楊楊外花。

十七日曇。測量樹木高低。

十八日曇。早起。整旅裝。與從弟乘小舟。待汽船來。忽而黑煙卷波而至。乃乘焉。船客雜沓。喃喃喋喋。談時事者有焉。論物價者有焉。談時事者吾知其

爲地方政治家。論物貨者。吾知其爲投機商。雜談者。大笑者。喧擾可厭。余乃倚玻窓眺矚。兩岸蒼樹。相送相迎。一一不可指點。此日天氣穩和。輕風徐度湖面。船走如矢。轉瞬間。遂經白濱沖。一望浩渺。僅見模糊之雲山耳。蓋北浦十里。爲灣三十有三。而其廣且濶者。以此處爲最。東南則水天卅里。青山盡處。即總州也。

遠山如醉山醒認。得白鷗近綠汀。兩岸烟霞春十里。描來一幅活丹青。山廓水村西又東。玻窓占了好春風。洋々三十三灣水。經過一聲汽笛中。已牌達大船津。乃上陸焉。水崖有華表。是爲鹿島神社第一華表。直上大黑樓。主人使導者誘余等詣神社。社在宮中村船津。十八丁。縣香道修繕成砂礫。學確不可步。乃自間道路。傍有根本寺。頗爲名蹟。而頽破不可見。又有鎌足神社。傳云。在昔藤原鎌足住此地。而大椽國題城址。在其後。阜云。曲折而上。三丁許。路傍有護國院。祀不動尊。堂頗宏大。形壁朱柱。亦可觀焉。既

而賽神社。祀武甕槌神。係于大同年間之創建。云構造壯嚴。靈威赫々。使人肅然起敬。境內廣濶。老杉鬱攢。天緬懷往昔。低徊感歎。不能去也。青山拙齋有詩曰。

深林鬱々古神宮。明德巍然鎮海東。野鶴飛廻華表外。流鶯啼繞瑞籬中。戎衣曾奮冠軍勇。靈劍猶傳開國功。千載長餘勇氣在。銀濤拍岸響松風。

藤森弘庵亦有詩。

游乃曾屠橫海鱗。長留一劍壓邊塵。鷹颺宣力周師尚。猶愧東方創業臣。藤田東湖詩曰。

常陸之東武雷神。威靈赫々幾千春。維昔鴻荒艸昧日。天祖御天天地新。光華照轍六合外。螢火蠅聲猶相因。斯神方奉勦討詔。勇武當時稱絕倫。意氣慷慨辭天闕。捷伐一峰掃妖氛。名高高州開國任。重天孫佐命。

臣。不知秩祀在何日。巍然屹立鹿島濱。山占靈地鎮東海。宮懸明辰對北辰。須識祖宗典天神。孝敬何敢殄祀禋。那圖一朝西風腥。蕃船忽載胡鬼臻。祭政岐別天人隔。淫祠妖教往々薰。悠悠世態雖萬變。明神正氣豈遂淪。餘靈時々出人傑。皇風或自常陸振。前有中。郎後梅里。英光共稱絕代珍。時運不免泰又否。功業從來有屈伸。誰知千古無窮感。如今還在布衣人。

余亦有蕪詞曰。

祠宇巍然東海濱。掃來妖賊勇名振。老松蒼鬱二千載。想見當年威武神。

社側有三笠社。傳云祀大神兜鍪。社東有三笠山。山中多躑躅。祠後有一巨杉。以瑞籬繞之。號曰靈杉。周圍可三尺。又有鏡石。因其形名之云。東數十武。有奧院。古色蒼然。葺以蘆茅。本祠初在此。更遷坐于今地云。

因號之曰靈宮院前。一小方石高數尺。上方有一孔。導者曰。此孔通幽冥耳。接之可以聞地。獄音響荒唐可嗤。左折下坂數十步。有靈泉曰涼泉。俗稱曰御手洗。地勢幽邃。樹影鬱葱。而水尤清澄。甘冷可掬。池中設華表。養鯉魚。紅白黑黃。各殊其色。甚馴人。側有茶亭。乃啜茗。導者云。此水大旱不涸。流為川。潺々到舟津。尤適飲料云。

山清而水秀。中有小靈泉。一洗風塵夢。掬來人欲仙。

休憩少時。更觀要石。圓徑可一尺。其頂稍為凹。字石。理酷似御影石。拔地僅數寸。繞以柵。傳云。太古大神所踞。又名御坐石。石根入地。不知其幾何。蓋盤石之頂見地下者。歟。鹿島之地。古來多勝蹟。其名夙著。東海所謂七奇稱者。七井戶神代藤等。今尚在。而高天原鬼塚。末無川等。在于東海之濱云。徘徊少時。遂還舟津。命畫餉。倚樓。放眸。北總之連山。起伏於烟波杳茫間。而馬耳峰巍然峙。天際浪逆之水。汪洋在眼下。

白帆之去來。漁村之點綴。悉寓于目睫中。於是乎心目豁然。意太怡。凝眸久之。未牌更投汽船。頃刻近高田。乃移小舟。蓋叔父豫使門生數輩迎余等也。薄暮辭高田。抵串挽。賃舟。從弟等相送者三人。慇懃告別而去。須臾到鉢田家兄之寓廬。時夕陽將沈。西山帶微紅。十九日雨。遂淹留焉。

二十日晴。早起整歸裝。出鉢田。再與家兄同行。取途於安房。雨餘泥塗滑々。殆欲顛踣。經田塍。度岡陵。紆餘曲折。漸出德宿。有溫泉。能治皮膚病云。北行殆二里。抵造谷小憩焉。過田崎。抵大谷川。驛。是為大谷口。乃就一小亭。命酌。亭枕川。清風明月之夜。可想矣。至大貫。辭家兄。還家。時申牌也。

斜陽曝網桃花外、
細雨繫蓬楊柳痕、
萬里長流供濯足、
不知人世有金盆。

(藤井竹外)



雨蕭々

こもるなさけの一言の、

身のはだしとはなりしより、

はかなくものを思ひつゝ、

過ぎしは昨日の夢なれや。

別れし時の何となう、

名々はし君のこひしくて、

こゝらあまたの年月は、

忍べる夜半もありけるよ。

花さく頃は楽しげに、

逢はんとわれは願ひしを、

仇なるたのめ一夜さに、

散りはてんとは思ひきや。

六十

しのびにしぼる我袖に、

また秋風の吹きさうへて、

人さへつらき青柳の、

糸のみたれをいかにせん。

かりねの夢の夢にだに、

迷ひのやみに迷ひ入り、

ありしと見えし面影を、

うれと幻にたどりつゝ。

はかなき雲のかゝるまは、

すむ月影もなにかせん、

かくと知りせばいさゝめに、

言ひ出るふしのありにしを。

弓はり月の影おちて、

あたり小暗きやれ寺に、

たがなき跡や尋ね來し、

涙にくるゝ少女あり、

あはぬ別れのかなしさに、

一日もかけぬ日はなきを、

六十一

なぞてか君のかへらぬと。

怨みしことも幾たびか。

六十二

白水郎あきのひくてふ綱ならば、

たちもきらんを中々に、

ありろの海の波あらく、

千々に碎くるわがおもひ。

小夜のねぎめのわびしきに、

君をしたひて只ひとり、

松のあらしのひまとめて、

昔をこふる想夫戀。

君しあらずはちりの世に、

かくてもあらん程ぞうき、

思ひを君につげますを、

あはれとおぼせしはしだに。

小暗さかたに落葉して、

やみぢに時雨ふりうゝぐ、

木の間にとぶはなき魂か、

やれし卒都婆もみだるなり。

たえぬ思にかきくれて、

物もおほえぬけうとさに、

六十三

わやなく君かみすがたの、
うれとわが眼にうつるなり。

きゝませ君よあすよりは、

わか身ぞ外に嫁ぐなる、

うき世の枷につなかるゝ、

心のうちを君知るや。

せめて今宵は一人して、

君がみはかにはべらんと、

来てし少女の真ごゝろを、

苔の下にていかに見ん。

よみちの道の遠くして、

ゆきもえやらぬおくつきに、

法の燈のとうしの影にて、

雨の聲さへ更けにけり。

春戸不局風暗入、

落花亂撲佛前燈。

(藤井竹外)



おぼろ月夜

六十六

うぐひすは訪ひこぬわが宿ながら、東風ふくかせの柴の戸をおどづ
るゝにまかせて、夕ばえの名残りかすかに山のはに匂ふ頃、おのれ
ひとり宿をたちいで、流れきよき小川の岸とめてきぬ。そここ、
と二つ三つ立ならぶ里の白屋など、ゆるやかなる烟りにいつしかた
ろがれて、あたり小暗くなるほど、ほのかに出でし春淺き新月の影
おぼろにて、年若き女藹などの心あるさまにけはひしたらん眉にも
似ためり。また如月なればのことなれば、尾の上ふく風の肌さむく、
心地冷え入るばかりなれど、清き歌心をもと、うすく地に映れるお
のが影法師を従者としつ、清淨の道を辿りぬ。危げにかけわたした
る橋のかたへに水車のめくる音耳根にかよひざまに、小田のあたり
水音冴えてきこゆ。某の翁がり近づくまゝ、匂しらぬ香りのわが袖

とめて飛ふなりけり。やみにも香やはかくるゝなとおもひうかびて、
垣根のうちによかしき林下美人にめぐりあふらんやうにて、古り
たる枝若き枝のいろくゝ紅なるも白なるも一つらに見すかされ、夢
ばかり淡き影うつる袖のうつり香も、いみじう色深うおさまさるに
いひしらすのどやかなり。花を月にたぐへんもことやうにて、月は
花のために情あるに似たり。月影のおぼろなるはやがて花のえんな
るにや、げにをかしき春の夜のながめ、さるは春宵一刻に千金を擲
てる人もありとか。おのれこよひはじめて天地の匂いはぬ美妙をさ
どりぬたる心地して、唐うたをも打すんじ居るにかなたに笛の音の
たへにきてゆるに、さては樂しみを同じうせる人なめりとゆかしう
て、節おもしろきしらべに耳かたふくれはふねの音は近うなりぬ。
何人の御すさびにやとことゝへは、打はゝるみてふりむきさまに月

六十七

影に見れば、年頃なつかしき故さとの友垣なりけり。こは君にてかさきくとと迭に手をとりつ、しばしぬいはであるを、月ころ君は都に上りしと聞きつるをいかで此の村里には居たまふやといふに、友はさればよやまひの爲に夏の頃よりふるさとに歸りしかど、なほくすしのすゝめに此里に起臥すなりといふ。さてとやるはつゝまじき事なりし。心にもあらでおとつれざりし事のうたてさよと、これかれとひとつはれつ、話しは夜ととも深うなりまさり、あかぬなこりを君のみや知るてふ梅のはなにかこち、月影をふみてわかれかへりぬ。なほ四つの袂にあやなつかしき香ころ残りしか。

澹月微雪滿意春、

一尊重碧話情眞、

不知今夕是何夕、

向此花前逢此人。

(小野湖山)



藤江亞山氏を輓す

七十

余や君に於て半面の識なし。平常君が詩を文庫誌上に散見し、夙に其風雲月露の高韻を仰ぎぬ。其後『頼山陽』『金港』等の金玉文字を見るに及んで、竊かに其風丰を眼頭に浮べ、其雅懷を心裡に描き、愈々欽慕の情を加へぬ。以爲らく、君は竟に、西塗東抹を是れ事とし、徒らに辭句を摘みて腐腸を曲庇するの、口耳四寸の輩にあらざるなりと。望を君が一身に囑して其大成を祈れりき。

爾來文庫の君が消息を絶つや久し。余輩は早晚君が詞華の必ずや一世を驚かすものあるを想像し、日に鶴首翹望して其出づるを待てり。俄然一陣の狂風は嫉妬の雙翼を逞うし、はらくと散り來る落花の碎片を摧破し盡して、無情の眼眸を冷かに睜りぬ。痛惜せんか、怨嗟せんか、寧ろ天道に疑なき能はざるなり。

嗚呼人生の恨事は死より甚しきは莫し。而して有爲の青年の夭折は恨中の最大恨事に非ざる無からんや。滿腕の肉動いて熱血沸き、直に起て壯圖を一世に試みんとするの曉に、不幸二豎の妨ぐる所と爲り、空しく血涙を飲んで、不歸の客と爲る。君が爲めに同情の暗涙を掬する者、天下豈に一人ならんや。

帆檣雲の如く、瀟笛雨の如き横濱の港、徐かに埠頭に立て遙に一髪の總房の連山を眺め、烟波激漣たる東京灣の水を見たるの時は、君が滿腹の經綸は蓋し溢るゝ許なりしならん。嗟呼山や、水や、尙ほ舊態を改めずして、空しく生前の人と吊魂の客とを、無限の聯想の間に貫絡せしむるのみ。哀しいかな。

謹んで君が靈を吊ひ、蕪詞を草して聊か追悼の意を寄す。



七十一

七月十三日雨。今朝ころ房總漫遊の途に就かんと、朝まだきに天を窺へば、陰雲雨を帯び今や降らんと思はれぬ。されどかねて思ひ立ちにしとなれば、今更やむも本意なく、孤筇飄然として五時半寓を出でぬ。けふより六旬の賜暇を得て、幾重の山川を越え、遙々故郷の空に旅立つことなれば、心地何となく清々しく、折からの雨をも厭はで、新橋に至り鐵道馬車を京橋まで驅り、右折靈岸島の東京灣汽船會社に來りし頃は七時二十分なりき。今日は都の孟蘭盆會なりとて、苧穀蓮葉など街頭に立ちてことごとくしく賣り行く老幼、魂祭りの準備流石に急はし。やがて解船に送られて本船に乗移る。第二房州丸にして長十數間幅二間頗る快速なり。旅客の多くは氣の知れぬ商人にていつも談は輸贏の事なんめり。時に雨歇み雲も漸く斂ま

る。漁笛一聲早も佃島をうしるに、品川砲臺の間を斜に縫ひ、羽田の洲も今は有るか無さかの如く、黒烟の薄く騰れるあたりはやがて横濱ならん。余等は今方さに八哩二分の一の速力にて南を指して進行するなりけり。

十一時四十八分浦賀に着す。船客貨物の乗下あり。こゝにて午餐したむ。浦賀は横須賀と共に東京灣の咽喉を爲し、東北に觀音崎あり、南に劍崎あり。灣内甚だ廣からずと雖も、水最も深く商舶寄港する者多し。灣を繞て人家鱗次し、青嶂更に其周を擁す。風景雅なり。憶ふに嘉永癸丑米國使節彼理が軍艦四隻を率ゐて、始めて此に入港し、驀然たる一發の砲聲に、太平の夢忽ち破れ、爾來我邦の交通貿易の般なる、殆んど舊進國を凌駕せんとする機運に進みし者、是れ嘗て一たび此關門を通過し來りしに依らずんばあらず。依稀た

る山河、尙ほ當年を夢み、果たして什麼の感がある。

名残惜しき蒼山烟水を感慨の裡に目送し、劍崎を右手に取り、南南東の方向に進航せり。此時再び細雨霏として至り、加ふるに外洋に近きの故か浪や、高く、船暈になやめるもありて、婦女子は皆船房の底に呻吟し、例の者を吐き出すさへありて、見るも頭痛の種と余は先きより甲板に上りて、轉た四邊の光景に恍惚し、顧みれば東京は已に雲の裡に没し去り、房か總か、一帶の綠黛も、雲脚低く垂れて之れを包み、渺茫の間を勇ましく指して行く方は金谷なりけり。保田、勝山、船形、那古、北條の漁村に寄港す、沿岸概ね斷崖絶壁緑の衣に僅かばかり石膚を露はしたるなど、風景いはん方なく、殊に勝山の海岸に浮島（一に鶴來島に作る）ありて、其の名の如く水面に浮び、四面削るが如く、密樹茂生海波と映じて一幅の活畫を現

出せるさま、に筆も詞にもと思ひつゞくるうち、初め平氣を装ひし余も、是に至て眩暈甚しく、何ともいへぬ心地となり、遂にえ堪へで汚き物さへあたり撒きぬ。

三時館山に着き陸に上る。館山は房南の一繁衢にして元稗葉氏の治所。灣内には船舶輻輳し、此半島國の貨物は重に此に聚るといふ。安房は一圓巖石質より成り、蜿蜒上下其餘脈直ちに海に走りて斷崖をなす。故に嶮礁多くして舟の寄るべきなし、從て國內の地質も概ね礫确素礪を下すべきは山と山とに挟まれたる掌大の水田のみ。されば人民の産業は重に樵漁を専らとせる者の如し。瀬海多く鰯を産せり。

鶴屋といふに宿る。驛の南里見氏の舊城址なる城山あり。晚涼趁ふて山に登るに、琵琶樹茂り合りて、累々たる其實味ふに堪へたり。

數枝を折りて後ち宿に持ち行きしに主婦見て笑ふ。余は東京にては斯るもの白銅一箇に價するなり、今圖らざる此獲物得てしも所がらにやと打興じぬ。やがて登り果つれば草祠あり、古龕寂として人の訪ふなく、半ば朽ちたる石に、荒草のみ萎々たり。所謂城春草木青の感あり。見渡せば鏡が浦（一に菱花灣の雅稱あり）一は碧明鏡を開くが如く、大房岬洲の岬雙方より嘴出して左右を劃り、鷹島沖島は恰も二點の黒痕を染めたらんが如く、富は遠く影を水に涵し、伊豆の大島は黛を遠巒の間に描く。實にや利を争ふ市井の俗人も、一たび此景に接しなば、榮辱を浮世の外に忘れぬべし。やがて西麓へ下れば、路を夾みて無數の海蟹戟を擧げ、目を瞋らして、何不平にや沸々泡を吹き余を視る。余も亦洋杖を擧げて之を搏つ。あゝ無腸の蟹よ、白晝傲然横行濶歩せる甲爪の利器も、あはれ一鞭の下に敢なく

なりては、人を怨みんか、寧ろ我を怨みんか、抑も世には之れに似たる輩多かりけり。

激澗と寄せ來る鏡が浦の磯邊に立ちて、旅のやつれを映し、夕日鷹の島の辨天社内^に落ちて、暮れかゝる蒼烟は遠き那古の邊より、次第に襲ひ來り、沖にゆらめく白帆の影も見分かずなる頃、あかぬ風光に別れて悄然宿に歸る。『晒網漁家夕照間。閑吟獨立菱花灣。最宜雨後如圖畫。烟靄西低淡抹山。』

十四日半晴。『遊子何緣愛嶮山。豈徒閑却六旬閑。平生養得膽三寸。欲試盤根錯節間。』朝宿を立出で、北條驛を過ぎしに、如何にかしけん道を誤り、東折松林の中に入る。村婦に問ふ、答へらくこは那古へ出づべき路なれど、甚だしき迂路なり、この田を踰ぬ、かしてに見ゆる松並木に出で給は、湊橋といふがあり、ろはやがて順路なり

といふ。余は丁寧に謝して過ぎぬ。いづくいかなる折にも、親切なる指導はと世に頼母しきはなかりけり。

行き行くに果して湊橋あり。是より電線に沿ふて歩すると里許、那古に至る。里見義成の居城なる稻村は是より東二里にあり。義實の瀧田城も東北二里餘に在り。本織村の延命寺こそ著名の巨刹にして里見家累代の塋域なれ。那古観音堂にまうでつるに山の半腹崖勢急下する處、規模の壯、丹雘の美、目を驚かす者あり。加ふるに房南の山水を一眸に萃め、那古館山二市の如き、皆蓐席の者と爲す。眺望極めて佳し。偶々堂の賣卜老仙二漁夫に向て。殊勝げに未來の吉凶を説き、したり顔なるに、余の餘りに接近して之を熟視せればかかれ突と堂裏に入りて磬など打鳴らしつるも可笑し。船形村は此山の背後に在り。余は其名に聞き及ぶ船形明神を訪はんと、田藤の間を

往來して村人に諮ふに皆な知らずと答ふ。よしなきにあたら時費してけりと舌打しつゝ、山の麓谷の隈など八回九折、勝山に出でんとするに、路遠くして足意に任せず。加之咽の渴すると甚しく、村家の井戸に水を乞ひ得ては、天の美祿を得し如く、路の傍の覆盆子を摘みては、一杯の檸檬水に飽く心地しぬ。物の味ひは時と境遇の如何に由るものなりけり。尙ほ進み行くに、彼方より牛驅ひ來れる十二三歳の少女あり、操縦甚だ爛々。敝衣蓬髮、色は飽くまで黒けれども、蔽ふべくもあらぬ愛嬌を其儘に、風度のやさしげなる、決して粉黛に思を凝す都人士の遠く及ばざる所なり。斯る少女にてすら兩親の手助けとなるは通例にて、殊に年増の如きは骨身も惜まらず労働し、牛を牽て絶淵に草を刈るあり。夫の漁せる獲物を車にて搬ぶもあり。他郷人の目には大に異觀を呈するものなり。又牛は此邊

の重なる運搬者にして、毎戸必ず一頭を蓄ひ、却て馬を養ふものは少し。想ふに土地岩石質にして、道途の困難なるより、馬の及ばざる所、牛は能く堪ふるを得るに因るものならん。凡る其地の特有物は、常に其地勢の必要より來るものなり。砂漠の駱駝に於ける、極北の馴鹿に於ける皆然らざるはなし。

木の根の洞門といふにかゝりぬ。墜道凡る五十間、黒闇々として晝なは夜の如し。市生にて午餐。直ちに勝山に出づ。之に次ぎて龍島に抵る、治承四年源頼朝石橋山の役逃れて上陸せし所なり。東二里を隔て、富山あり。山秀で、景勝佳なりと。余少時八犬傳を繙き、伏姫が金殿玉樓に在るの身を以て、萬民の信を重んじ、父家の義を樹て、獨り八房の犬に伴はれて、富山の奥に分け入るの段を讀みては暗涙の滂沱たるを覺むざりしが、今遙かに雲烟に鎖さる、其山を

見ては、縦ひ其事の假設的なりしにもせよ、當時の心情纏綿たるを追懷して、一滴の血涙無くんばあらざるなり。時間だに充分の餘裕を與へなば、余は直ちに山間に入りて、幽魂を地下に吊ひしなりしならんにと、思ひ續けて保田に至る。即ち鋸山麓なり。目を上ぐれば兀立して危峯天を刺し、早く已に其凡境ならざるを知る。四時近き頃、羅漢道と榜せる樵徑を索めて辿り行くに、經王堂といふに來る。五百羅漢の石像を置く。日本寺といふは是なんめりと一拜したつて、更に危路仄徑を纒かに木の根岩角に縋りつゝ上る、見上ぐれば萬仞の絶壁乃もて削り、見下ろせば千丈の深淵碧潭に染めり。一步を誤らんか、身は立ろに輾下し去つて、人無き谷底に祭られぬ鬼と化せざる可らず。身震ひ神驚く。山鳥鳴き絶え水聲轉た凄く、上るに従ひ路愈よ急に、心臟の鼓動醫すべからず。一步一喘といふより

は寧ろ一步三喘といふ様にて、段を逐ひ階を拾ひ寸進するのみ。方石の路傍に横はるもの多く、こは皆頂上より石工の切り出したるを婦女子が甲斐しく、地車にて麓の里へ運ぶなり。慣れたることて此等の婦人は地車を携へつ、楔の如く急に、其轍の通ずる處は凹となれる、極めて危うげなる石路を、事もなげに下るなり。唯た不思議といふの外ぞなき。辛くも頂上に達すれば、四顧の雲山、秀は抱む可く、清は掬す可く、神韻縹渺として身はすでに天地と融合し了りぬ。立馬吳山第一峯、誦し來つて自ら仙ならんと欲せし余は、絶嶺に立てしばし息を休め、來路を顧みれば石徑綫の如く、保田村は脚下に來りて風近く衣袂を拂ふ。遙かに南端を限るは洲の崎か。西に青山の盡くるところは劍崎なるべし。大凡房州の山彙は皆此に聚りて南總を限り、餘脈西に盡き明金崎を海に斗出す。一山の靈奇決して人

智の窺ひ得る所にあらず。宛ら造化が絶大の鬼斧を以て、巖石を削りたらんが如く、其斜面の急下せる、殆んど八十九度とも云ふ可く尙一度を増せば直立とならんかと疑はる。山上石多く、石工鑿を下して之を切り取る。其質を案するに、概ね水成岩なるか如く、石質柔脆、堅材として用ふ可らず。されど能く火に耐ふるを以て、石造家屋の建築に適し、頻年東京へ出す者決して尠少ならずといふ。二詩あり曰く、『雲梯矗立向天攀。亂石重々別作關。太妙化翁鋸器在。鑿來房總二州山。』百尺劍峯一路分。蒸空蒼翠絕塵紛。脫來擾々人間熱。松籟聲中臥白雲。』

五時復た匍匐して來路を下り、忽ちにして保田に達し、更に鋸山麓を過ぐるに、巖石を穿て坑道を爲くる者五、明治廿一年五月の竣功なり。天井は穹形を爲し、扇形の板石駢列し、層々相噛みて愈々堅

きの理に本つくものなり。上は絶壁天に聳ゆる、巨巖目を瞋らして海清を呑む。其嶮要なる所謂一夫路に當れば萬夫進む能はざるの地なり。是れぞ名にあふ明金岬。此を出つれば上總國君津郡なり。往古には總に上下の區別なし。神武紀元の初年、天宮命阿波の齋部を率ゐて此土に移住し、麻穀を播種す。故に之を總の國と稱せしとか。後成務天皇の朝に至り。之を南北に割き、上總下總となし、元明帝の朝上總の四郡を安房となせり。安房は四國阿波の民を此地に移殖せしより、同音の國名を用ひしと云ふ。舊記に見ゆたり。日已に晡なるを以て馳せて金谷に到る。流汗淋漓として拭ふに遑あらず。今日の温度は土用後珍らしき迄に炎熱にして、余は井を得る毎に之を汲み、水を見る毎に之を嚼み、一時の急を防ぎぬ。若し精密なる醫者ありて、余が飲みし水と流れし汗とを比較せば、正に相等しきを

見出せしなるべし。

尙は急ぐ程に、日は三浦半島の彼方に落ちて、觀音崎の森蔭も今は眠るが如く、蒼烟水を度て前程を包みければ、已むを得ず、竹岡村松屋といふに泊る。前川に浴して僅かに塵垢を去る。此時黒雲の間より電光一闪、あはやと見る間に、雷鳴近く頭上に起り、雨沛然として至る。夜は早くより枕に就きしも、窓を撲づの雨聲、終夜客夢を襲ふ。周遊天下滌塵襟。奈此天涯鄉思深。雲繞斷橋荒驛外。雨昏疎柳古碑陰。夢中有夢茫難迹。情裏生情旺不禁。半夜孤眠幽窓下。殘燈細照遠人心。

十五日曇。清和快風體に適し、朝蚤く足も輕げに、貝殻砂礫の堆積せる街道を湊に來る。湊は天神山と稱し、湊川の河口に臨める市邑にして、亦た要港なり。

街を離れて東折し、糜粥の如き泥途を急ぐに、汚班駘を没して、行けども、同じ處に躍る心地す。村夫に鹿野山への道をとふ。一帯の連山を指して彼なりといふ。乃ち弛み、始めたる氣力に鞭して阪路を上り、次第に長松雨の如く繁き間を縫ひ鬼涙山きなびといふにかゝりぬ。こゝは往昔日本武尊東征の日、匪賊涙を流して命を乞ひし處なりと傳ふ。蜿蜒たる丘陵を半里も行く程に、早くも老檜蔚然たる鹿野山に達す。鹿野山の碑ありて縁起を勤す。神野寺は承和年間の舊刹にして日本武尊を祀る。其の宏麗素朴は此異境をして一層の壯嚴を増さしめぬ。境に入れば、自から深邃夏時の來客も夥しく、茶店の如き十を以て數ふ。眸を放てば八州の野は盈上の園池の如く、所謂寸人豆馬の奇觀あり。茫々東南に瀾蔓するは外洋なり。白沙遠く西に斗出せるは富津洲なり。山の綠、水の藍、所として見ざるは無く、見るとして好か

らざるは無し。慨然として去るに忍びず。「滿山積翠碧於藍。九十九溪冠總南。暫駐馬天蹄半路。煙嵐看過入煙嵐。」

時己に午を過ぎ汨々たる腹の飢を訴ふると頻りなれば、急ぎ下りて市宿に出で、數椀の脱粟飯に、纔に勇氣を回復しぬ。此邊の井戸概ね突抜にして、水面は常に臺所より高く、落つる水にて米を磨ぎ、魚を漉ふ。之を飲めは一種の臭氣を帯び、飲用に適せざるが如し。小糸川を渡れば萬頃の秧波徐ろに吹き、足勞頓に忘る。會々一個の商人と語り、共に地方の珍談などしつゝ、五里の路を早くも木更津に着く。松江屋といふに投じぬ。

漁廬烟家の斷續する處、海濱一帯、砂白く水淺く、汽船は里の沖に碇泊し、輕舸は八町の外に繋り、腕車相次で旅客を載せて水中を輾るの様、頗る奇觀なりといふ。

十六日半晴。朝七時、江戸道と榜せる舊道より、本道に合するまで左右は微茫たる青田なり。小櫃川を渡り、奈良輪に到る。一隊の男女。長袖緩帶。迭に八尺月琴を打鳴らし、編笠の裡に紅顔をほのめかし、談語大笑浮かれつゝ、渡りゆく、世には氣樂なる連中もあるものかな。十時半姉崎に入る。鶴牧と稱し、小野氏の采地なり。姉崎神社といふがありて、今日は例祭なればか、姉崎合戦など描きたる桃燈掲げたるも、所がら面白し。久保田にいつれば、道は海岸に沿ふて遠く漁舟の網うつも見ろ可く、名さへゆかしき養老川は、河瀬の波も清らかに、白沙遙海に入り、堤上櫻樹數十株を植ゑて、樹の間々に茶店の點綴するなど、宛然小墨堤の觀あり。五井にて晝餐。八幡には八幡神社あり。社前老銀古樹あり、白鳳四年、季滿卿手から栽する所なりといへば、其老古知る可し、石ありて題詠を鐫せり。今

日の温度は非常に低下して、寧ろ寒冷といふ可く、東北の風屢々雨を醸し來り、氣象の變動著るし。

八幡にて、一人の翁と道連れと爲れり。彼は素朴質直、銅顔に銀髯を蓄へ、腰に梓の弓を引けり。携ふる所は一蓋の笠と一條の杖とのみ。鏝鏢として種々の面白き浮世話をなしつゝ、行く。年はと問ふに七十五歳と答へ、何處よりぞと推せば、稻毛の漁夫に候が、過つる日愛孫の神を汚すことありて病を得しかば、五所の稻荷様へ心願を掛けしに不思議や病は烟の消えゆく如くに癒えぬ。餘りの有難さに今日は日頃の神恩を謝せばやとて、朝早く五所へ參り、今歸るさなりといふ。情ある翁かなと、只管感じつゝ、行くに、森川氏の舊邑曾我野に至る。曾我野の東、生實郷といふ處に、足利義明の據りし小弓御所ありと聞けり。

老翁に別を告げて、寒川より千葉町に着きしは午後四時なりき。寒川村字長洲に小橋あり。君待橋と云ふ。治承中千葉常胤源頼朝を迎へしより名つくいふ。又白旗神社は常胤兵を募りし跡なりとか。五時登美屋に投ず。浴後月を踏んで散歩す。久しく雨に閉されし月影の今宵は殊に心まで澄み渡り、飄然輕衫を風に吹かせつゝ、千葉神社に詣づ。天御中主神を祀り、輕津主神、日本武尊を配享せり。其の殿樓門廡、輪焉奐焉の美を備へたり。

十七日曇。氣候昨の如く冷を覺ゆ。朝夙く朝餉を了り、六時停車場に向ふ。待つこと少頃にして、七時十六分の流車に搭じ、全四十五分には堀田氏の城下佐倉に着き、八時發の成田線に乘移り、聯隊の兵營は彼方の森蔭ぞ、印幡沼は此方ぞと、言ふ間も疾しや遅し、酒々井を打過ぎ、早や成田々々と呼ぶ驛夫の聲に多年渴仰せし不動尊

を拜む嬉しさに飛び下りざま、成田山と胸に札したる信者の群衆を推し分けて、新勝寺にまうづ。

賽者の多きに先づ肝を消し、次第に石磴を拾ふに、御劔如來像など、いくつとなく石に刻せられて左右に立てり。二王門を入りて不動明王の龕前に額つき、轉た其壯嚴華美に目を驚かしたる余には、鐘樓、三重塔、光明堂等を一々摸寫し難かり。別に花畑には照輪和尚の碑あり。一切經藏の回堂は、之を回せば悉く聲律を爲す。女童嬉んで之を推す。抑も寺は天慶二年の創建にして、海内著名の巨刹なれば其之が爲めに烟を擧ぐる者萬家、優に北總の一名區を爲す所以の者亦宜なるかな。

更に路を轉じて公津に至る。宗吾靈廟新に成り、極めて壯麗なる殿堂を構へて其靈を慰めたり。傍に其墳墓あり。公津は木内宗吾が郷

里、當年の大守堀田正信政斂極めて苛刻、人民の憤ること甚しく、遂に惣代と推されたる宗吾は黙止するに忍びず、奮然許すに身を以てし、候の出駕を埃ち、哀訴せしかども、熱誠は却て虚傲と誣ひられ、歎願は翻て越訴と目せられ、遂に梟木架上一片の烟と消ぬぬ。嗚呼、赤誠の民権家も、専制の當時に在りては、竟に奈何とする能はず、空しく冤を呑みつゝ、徂きぬ。されど今尙三尺の卵童も、佐倉宗吾の名を口にして其義を慕ひ、其事實を誦するものあるに至ては、耿々たる一道の義魂が、百年の後如何に人心を涵養し來りしかを見るに足るべからずや。

時は十時半なり。酒々井停車場へ十一時十四分迄に到らざる可からず。餘す所僅に半時間のみ。道程を問へば一里半なりといふ。さて如何にせん、飛ぶに羽なき身の、たとへ息もせで走ればとて、時間

までに達すへくもあらず。さりとてかくて止まんは、折角釣りかけし魚を放つに似たり。如かず力の限り試みんものと、傍人の目には怪しと見るまで、印幡湖畔をひた走りにつゝくれば、思ひの外、はや其處なりといふ。發車には尙十分を餘すに舌打して、先に一里半と教へし者を怨みぬ。さばれ遠きと知ればころ、急ぎて間に合ひしなれ。ろを今更怨むべきかは。あゝ世の中は斯る事に喜怒哀樂の七情を動かすものよと、感慨の間に佐倉に戻り、更に十一時五十分の銚子行列車に乗移る。横芝驛よりは一般に土地平坦にして沙質、其間田野拓けたるもの少く、雑木の林地のみ大部分を占むるが如し。勁風窓を撲ち、織沙飛んで室に入り、征衣爲めに白し。弦巻村登々美に墜道あり。長さ三百二十間、車暗中に在るもの約三分、出づれば則ち飯岡、銚子に着きしは二時十分。

銚子の町たる、宿驛の長き鎖の如し。如舟學舎の青木氏余を待つ懇
 款一見知己の如し。日も夕ぐる、頃氏と伴ふて散歩す。丘漸く起伏
 せる處、觀音堂に上れば、綠日とて銀燭は照り、鈴の音は響き、露
 店數しれず並べるさま、酷た淺草と似たり。川口明神に詣で、海波
 の澎湃たると。白き人家(屋上牡礪を載せたるもの)とを眺め、一目
 浩渺神胸頓に躍る。やがて海濱に下り、貝を拾ひ、藻を搔き、海濤
 怒て吼る如き巖頭に立ち、凜船烟り遠くして雲に入らんとするの妙
 景を默視し、心神早く己に曖然たり。

海門高く嶮礁を撐へ、兀坐する所、偃臥する所、横なるもの、走る
 もの、備さに奇巧を極め、帆掛岩、海獺島、權九郎岩等、一々記す
 可らず。西南一線の沙岸割せるが如く、上總の大東岬に至る。之を
 九十九里濱といふ。女夫が鼻はうれよ、大吠岬の燈臺は彼方ぞ、ろ

れに見ゆるは常陸の羽崎なりと、宛然有聲畫中の風趣を看取し、恍
 然歸るを忘れし折、今夜また暴風雨にやならんと咤く傍の漁夫に驚
 かされ、見れば陰雲黯淡として、潮聲も暮れ行けり。

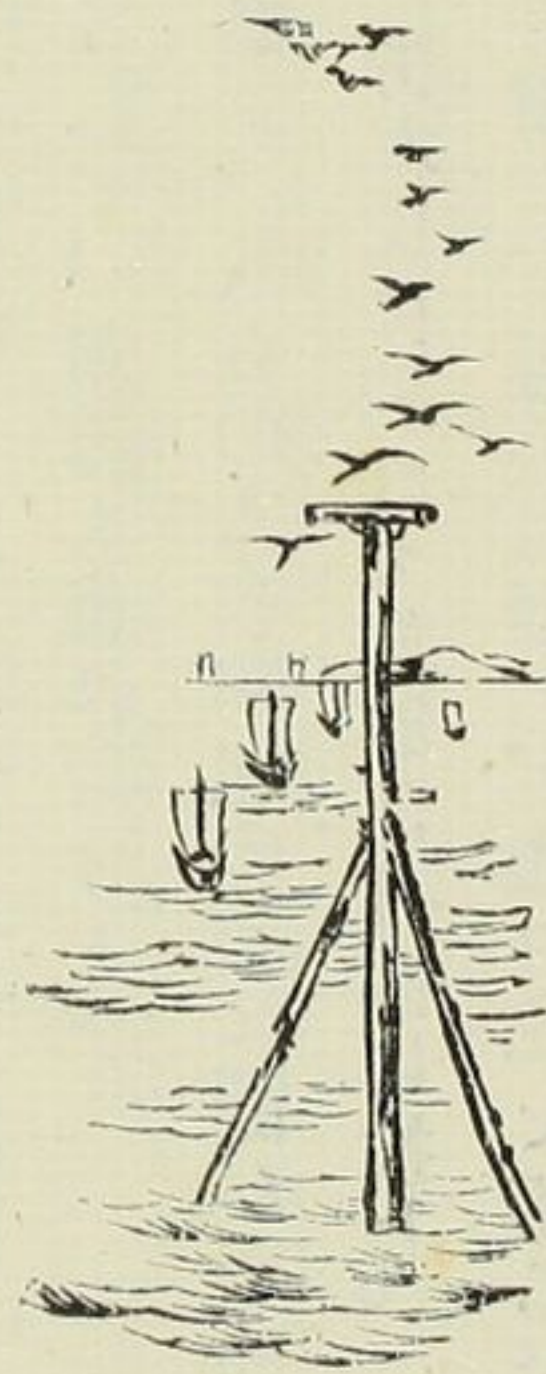
歸途復た觀音の一茶亭に憩ふ。八百の人家潮烟の間に漂ひ、漁火三
 五微かに滅明するの頃、青木氏に別れて旅館江月樓に投じ。樓の
 一室に導かれ、獨り行李を開き、短檠に對して旅日記を綴る。隣室
 には綠酒盛に漲り、金紘切りに鳴り、所謂『百萬一時盡』を學ぶの
 豪遊子あれども、僅かに屏障を隔て、孤衾の下獨り、冷夢を結ぶの
 寒遊子あるを知るや知らずや。『海天一色望漫漫。款乃聲中獨倚欄。
 漁火滅明知那處。潮聲半夜夢魂寒。』

十八日雨。朝來窓を推せば烟雨霏微、加ふるに風激しく、海潮の怒
 號物凄まじく聞ゆ。今日の出立も覺束なけれど、凜船に促され、雨

を衝て埠頭に至り、直に乗船しぬ。雨は次第に名残なく霽れわたり、常山總水、宛として一幅の活丹青を展べたらんが如く、白雲迢々として還りゆく頃、鉾田に向て進行せる通運丸は、余をして遂に苦しさ、面白さ腹立しさ、樂しさ此旅寐をこゝに終らしめぬ。

九十六

古郷有母秋風涙、
旅館無人暮雨魂、



井筒の水

花よりあくるあけぼのも、

螢とびかふ星の夜も、

形に影にむつびにし、

昔のゆめは今いつこ。

小雨ろぼふる窓にきて、

ともに寫しき草はなを、

野川の水に二人して、

ともになかめさすかたをは。

舞へる蝴蝶に身をよろひ、

霞にまどふ衣を着て、

九十七

我等が春はいつまでも、

去らじところは思ひしか。

九十八

夢の浮世のゆめの跡、

尋ねんかたもねばるにて、

はやかの君はよろ人に、

とつがれしとは今ぞ聞く。

井筒の人は今もなほ、

昔なからに澄むめれど、

一人さひしき影を見ば、

水はなにとか思ふらん。

心のはなのたのみなき、

あらしにもれぬうたてさに、

思はじものをなかくくに、

残る心をいかにせん。

長洲花外草蕭々、

却計遊程歳月遙、

唯有別時今不忘、

暮煙秋雨過楓橋。

(杜牧)



九十九

みなれざを

行き交ふ人を渡しつゝ、

朝夕なれしみなれざを、

うき世にとほきわか身にも、

いつかは波の寄せ來なり。

思へは月すむゆふべより、

あやなつかしき我妹子と、

むすひろめにしたのしさも、

かへらぬ夢となりにけり。

心にかゝるいたつきに、

はかなく消えしるの人の、

ありし面影しのびいで、

いぬるにつらき小夜衾。

かたみとなりしをさな子の、

たつきもしらでしたひくる、

露にもなやむ撫子の、

いかにつれなき世なるらん。

しつけき小屋のどのもより、

水音ばかりれどづれて、

今かさえゆく火影ほかげには、

あはれなく子の聲すなり。

春潮帶雨晚來急、
野渡無人舟自橫。



遊五浦記

五浦距勿來東南里許。其地屬常之大津村。水光清秀。亦爲東海之名區焉。然以其地在僻遠。未大彰也。乙未之春四月初二。與望洋同遊。乃過大津。從北方小徑曲折盤旋。行數百武。漸而達焉。浦頭懸崖擁海水。成一小港。後則負丘陵。東北面太平洋。波濤洶湧。石磯點綴。自是一小仙寰也。往昔芝田稻作者。設垂釣所于此云。今存其跡耳。而巨巖魁石與松根蟠屈。如怒鷲。如嘯虎。或大或小。橫者平者。立而舞者。臥而踞者。一正一奇。一開一闔。其變幻不可模狀也。時有一小舟自北來。數人篙師盪櫓甚嫻。巧漕回嶮。暗礁之間而至。更添一奇觀焉。乃倚石眺矚。東北方蜿蜒錦亘。爲虯龍之狀者。小名濱之岬角也。北傍崑石并峙。攢然相銜者。所謂鐘鼓洞也。蓋洞在平瀉之東南。洞穴陰黯。峭壁削立。海潮激之。殷々爲聲。故名云。余等意欲探其奇。然以時已過。未牌遂不果。夫五浦之景。山得海而不孤。海得山而全。山水之玲瓏。

明媚。曲極造化之雅致焉。其西北連山。遠淡近濃。如笑如迎。宛似展一幅之活丹青。真絕奇也。嗚呼天然之奇勝。余於五浦始得之矣。於是乎陶然與灑氣樂。怡然與造化游。自覺心骨融和于此神韻縹渺之間也。既而篙師棹前所乘小舟而去。潮聲亦漸抗進。四色寂寥。不可久留。余等乃相促。期後日之再遊。遂向平瀾。

輕舟短棹唱歌去、

山高水長愁殺人。

(高適)



戈まくら

宵の野分の聲やみて、

小夜更けかたのさひしきに、

荒野の床の肌さむく、

ならはぬ夢の結びかね、

月の光りに見わたせば、

流るゝ川のとほしろし。

國のためにとますらをが、

行きもならはぬもろこしの、

虎ふす野べや八重の峰、

まつろひはてぬして草を

打ちも刈らんと一すぢに、

百六

をしまぬ身をばさくげつ。

鴨^{あひなれがは}緑江に氷どぢ、

峰はふいさにさへられて、

身をさる風のたへがたく、

筒のけふりはこむれども、

向ふやからを打はたす、

大和男兒は背は見せじ。

明日はつとめて打立たん、

今宵はこゝに夜もすがら、

草野か下のつゆの宿、

月を友寝のたまくらに、

秋の月毛の龍駒の、

いななく聲も通ふなり。

落葉かつ散る朝の露、

木枯すさぶ夜半の雪、

其れにひるまぬますらをが、

天かけるてふ真心は、

嵐に折れぬ松が枝か、

槌に撓ます黒鐵か。

腕^{かひなし}の肉のふるふまで、

百七

はやる心の湧きたちて、
結びかぬるをいかにせん、

抜くや三尺の腰の太刀、
秋のなかれの影さめて、

こがねの蛇ぞをとるなる。

星の光も薄らぎて、

夜明のうらにはどちかし、

松の篝火のこれも、

一入さゆる朝風に、

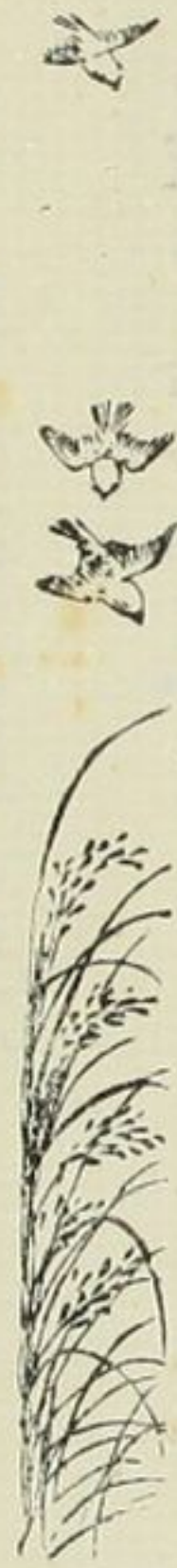
勇みたちたる武士の、

鎧に霜はむすぶなり。

ものゝふの矢並つくるふこての上に

あられたばしる那須のしの原

(寶朝)



かこで

榮は我兒よ業遂げて、

はやく歸りぬふる里に、

かざる錦の花衣、

桂の枝も折り添へて。

百十

世のうき波はしがすかに、

いかで荒しと聞くものを、

楫さへ絶たはいかにせん、

努心せよたゆまずて。

心づくしとたがいひし、

有明月の影うすく、

さらぬも別れの惜まれて、

峰のよこ雲さりあへず。

物思ふ間のとだえして、

いやも亂る、糸心、

心強くもはげましつ、

さらば母上とばかりに。

とさく我子といく度か、

言寄るわつさみなさげに、

濡るゝは草の露のみか、

夢路をたどる心地して。

百十一

顧みがちにいで行けば、

はやも過ぎゆく苦の道、

里はけふりに鎖されて、

いつことわかん方もなし。

歸舟明日毘陵路、

回首姑蘇是白雲。

(白玉甫)



坐頭石

(其一)

高萩村を西へ岡阜起伏せる間を過ぎて、山部村に出る途中に、一つの長さ嶮しき坂がある。左は森々として杉の木立繁く、右は峭壁千丈、巖頭に立て眺むれば目も暝眩む許りの谷底である。左は高く右は低く、實に鳥も通ひ難きの峻路だ。この恐ろしき峻路は是れ『坐頭轉がし』てふ名の下に、里人に怖れらるゝ處である。

余は一日常北の小港平瀨村へ行つたのがあつた。歸りには用事があつたので。山部村へ立寄りねばならなくなつた。太陽の光線も善くは當らぬ山間の僻村へ行かねばならぬのだ。余は此時思はず何物か來て余が心膽を冷やしたらんが如く、胸裏一種言ふ可からざる念ひがした。是れは何故であらうか。時は二月の初めであつて、寒風颯

々と襟元を刺し、加之に日脚短くして太陽は早や山の端を去る二丈許りの處に達して、どんなに急いたとて高萩に至る頃は日暮になつてしまふ。ろづすると夜に入て彼の恐ろしき魔窟「坐頭轉がし」の坂を蹴ねばならぬ。あゝ晝なほ寂しき山路を辿らねばならぬのだ。余は思はずツツとして肌を粟を生せん許りだ。されど東州の鐵腸男兒、何をか恐れんと自ら奮發して愈此を通るとに決心した。

鎮守の杜を僅か離れた一本の枯柳に鳥が止まつて、夕暮を鳴き始めた末は夢かと思はれるやうなおぼろげなる烟りが、一面に村はづれを罩めてしまつて、例の恐ろしき坂近くさし掛つた頃は、暗澹たる夜影は寒きギラ／＼した星影を疎らに洩らし、何とも云へぬ腥き風がヒューと音して頭髮も立つかと思はるゝ。流石覺悟した余も俄か

に怖氣つき、前後の物音にも心せかれて、ひた走りに坂を上り始めた。エ、氣の揉めるとよ、笹の葉までがサヤ／＼と鳴る。

余は是に至て最早やたまらず、水を浴せかけられた様に後をも見ず一生懸命進みに進んだ。

余は聞いたとがある。昔し盲目なる一人の坐頭が此坂に於て惡漢の爲めに撞き落されて死んだとがあると。あゝ思ひ出せば今余が辿れる邊りは其場所ではあるまいかどろ／＼縮み上つた。

途端に余は正しく一個の大入道を見た。しかもニヨツキと立つて此方を睨めて居るらしい大入道。驚くまいとか、アツと叫んで余は仆れた。

(其二)

其後幾時間経つたか分らない。身に浸み渡る寒さに氣が付いて、胸

の動悸が激しいまゝ、轉げる様に落ちた東の坂路を折れ、田甫のな
 かをどう歩いたか、燈火かすかに洩る、村里の、とある白屋くまのやの軒端
 に一夜の宿りを乞ふた迄は、殆んど人心地無かつたかも知れない。
 圍爐裏ほんびに槽火ぼんびを焚いて六十餘りの老翁が。六十許りの老媪とさし對
 ひ、しきりに鍋を煮て居つたが、俄かに戸口に余の現はれたのを見
 て怪訝けいんな顔をして此方を熟視じゆつめして居る。決して怪しい者ではない、今
 夜路に迷つて困る者なればと丁寧ていねいに頼んだので、稍々安堵あんたしたか、
 ろれは嘸なぞ御難義ごなんぎな事で御座らふ。此方へ寄りて焚火にあたられよ
 と云ふ。いつくの世も里人の心は嬉れしいもの、ろの儘言葉に従ひ
 て圍爐裏に進み寄るとき、老婆は澁茶しぶちやを汲んで、こんな山家のと
 ゆゑ何も御馳走を進らすものなし、此の蓆むしろにて打寛うちくわんろぎ玉へといへ
 ば老翁はいま甘諸粥かんしよがくも煮ゆる間、ゆるく話でもなされよと、果て

はからく〜と笑ひてはや馴な々しげである。

話し、げに話すべきとがある。老翁よ今宵こよひ余が『坐頭轉がし』の坂に
 てと、余は彼の大入道おほいりだうのとの始終を具さに語り了つた。

語り了つた時、老翁は輪りんに吹ける煙草たばこを爐縁ろゑんにばんと叩いて、さて
 くろは怖おそろしき事で御座らふ。翁はうれに就いていとも悲しき物
 語のあればしばし聞き玉へと言つた。

此の村に一廬いつらの眞言宗しんごんしゆの佛刹ぶつせきがある。先きの住職ぢゆうしやくが死んだので、其
 弟子ぢしとなりて長く此住職ぢゆうしやくにまめくしく仕へて居つたのが、其後あと職
 に座すわる事になつた。臨終りんしゆうの際住職ぢゆうしやくはこの弟子を側近せきぢんと呼んで、佛の
 誠まことしめ、因果いんぐわの説法せっぽうなどを、懇々こんこんと説き聞かせて、さて汝そなたは夙もともとくよ
 り兩親りうしんに捨てられて此村にさすらい居たるを、吾れ不憫ふみんに思ひ救ひ

上げて斯くは生かして育てしなれば、くれぐれも佛の道を守りて村人をいつくしみ、此寺の名折れとならざる様にせよと言ひ残して、朝露の消ゆるが如くに死んだ。

弟子の僧は涙を流して、其葬りをいと懇ろに行つた。

此後幾年かを経て、此僧は深く前僧の跡を追ふて徳を修め、前知識との評判をさく／＼近隣に高かつた。

此頃であつた。此僧に仕へて居た小性の菊丸といふ美はしい兒こゝろが、不圖した病氣から遂に敢なくなつたので、僧は非常に力を落し、泣きもし、悲しみもし、終には食事もせない位、今は全く絶望した有様である。

かくして彼は一個の狂人の如く、彼方此方をうろつく身となつた。

或時は袈裟を被り、或時は草鞋を穿ち、西に東に飄然と漂泊するの

である。

夏もすぎ、秋も去り、ある冬の晩、暗き寒き小夜中過ぎ、如何なる夢にさうはれてか、彼れはかの『坐頭轉がし』の坂路の松が枝に縊れて死んだ。さぞや冥途でも浮ばれなく、魂魄この世に迷ふとであらう。風は荒く雨は昏く、啾々たる陰氣は夜なく／＼怨んで居る。村人は憐んで圓き石を建て、其骨を埋めた。

貴郎の大入道と見誤られたは大方うの石塔でがな御座らふ。

つまらぬ話に時を費したり、いざ甘藷粥も煮えたられば一椀すゝりたまへと前へ出した。其夜は談話に更けて子の時ばかりに膚寒き夢を結んだ。

夜明けて後、余は一夜の恩を厚く老夫婦に謝して別れた。折あらば

又來たまへと老翁は、額の皺の川の字に溢、ばかりの真心を浮べ、ろして腰に繩の帯をしめ、殊更ら元氣ろうな目つきで門邊に立つて見送つて居る。

山空松子落、

幽人應未眠。

(章應物)



靑鞋のつゝれ

雨中の一隊

落花空しく狂雨に洗はれて、新緑漸く杜鵑の聲を洩らすの好期、多摩の清江に一日の快遊を試みばやと、同志の一隊約整ひて其日を俟つ。然るに五月雨近き空の常とて、朝よりいと、氣つはしかりしに、六時に至り果してぼつ／＼降り始む。失望の餘り怨めしげに、天の一方を睨めつめし甲斐ありて、重なる雲の絶間より蒼空の見えるめたれば皆々勇み立ち、いざ行くべしと、隊を整へ伍を組み出て出發せしは七時を超ゆる二十分にてもやあらん。伊皿子より例の田塀の間を過ぎ行く程に、又もや降り出す千條の雨脚、征衣もしどいに途は抄取らず。しかもなほ七十の健兒覇氣稜々、齊しく壯歌放吟して、先發隊は早くも大森八景園に上り、平田萬頃近く一帯の靑松、街道

に沿ふて走れる間より、白帆隠見品海を去來するの壯景を眺め、濕衣を脱して清風を容るゝ者あり。時に雨歇む。復た行くと十町程、池上本門寺に達す。日蓮祖師弘法の一本寺、所謂南無妙法の本山とかや。

境内の舊跡を探りて好奇の史癖を満たす者、雨中球戯を弄して腕を鳴らす者、思ひくの樂しみの眞最中衆みな報を得て五重塔下に集まり、碗を手にし豚羹を啜る。蒼翠滴たる林樹の間、石を構へて、爐を作り、火を焚いて其煮ゆるを待ち、迭みに三椀の甘羹に満腹の泪々を鼓する至つては、翠帳紅圍の内八珍の美に飽く貴紳者流の、また其妙味を解する能はざる所、親しく這般の事に親炙せずんば、誰か輒すく其の愉快を悟り得んや。

『自是不歸歸便得、五湖烟景有誰爭』五湖の烟景のうれならねど、江

流ゆるく流るゝ橋を渡りて、滿懷の風興長きを覺えつゝ、足に任せ
て歸る。

小金の茸狩

一行は三十人、處は小金が原、時は是れ落葉散りそむる丙申の十月十六日。

短鞋輕袴縦横に濶歩せる壯者の中に打交りて小梅公子の徒行せられぬるは皆齊しく感泣せらるゝ次第なり。かくて瓦町より川に沿ひ一直線に北に進む。こは引舟とほりてふ千篇一律なる風景も迭みに語らふ話の興に任せて日西山に没せんとする頃一茶亭に憩らふ。

中川の水漫々として岸を浸し、近きわたりの田畝には先頃の洪水汎濫の名残を存し纔かに刈乾せる稻束さては昨日繕ひしと見ゆる人家の壁など轉た當時の慘狀を忍ばしめぬ。

乃根の碧流堤を縫ひて走れるあたりより松戸の津頭に至る。十日の月影雲間に淡く冴え渡り、遠く流山の邊は一帶の煙靄に鎖され、對岸の燈影水に映りて長し。餘りの絶景に口吟む。

蒼茫一水萬波頻、千里長江詩意新、對岸櫓聲認不得、總州人喚州人。

四三燈影水中長、古驛蕭々隔柳塘、橫笛一聲人欲去、滿江風露月如霜。

やがて川を渡りて松戸驛に出で、更に路傍の小徑より山路に分け入り、亂山高下してほのくらさ杉の木立を、わづかに洩る、月影に、羽音さびしき梟を驚かしつ、遂に上りつめて一同松戸侯の閑邸に伺候す。邸は極めて幽靜なる境にありて雞犬の里を絶てり。侯には親しく一行を勞らひ玉ひ、欸乎たる温容の間に物語などせさせ玉ふ。

日ごろ山中にて撃ち止め玉ひつる鳥獸幾十羽となく並べられあるなど、侯の心の中ゆかしうて、こゝに一行に酒肴を賜はる。兩公子には今宵一泊あらせらる。

夜八時再び山を辭して驛を下り、小金に向ふ。既にして定紋つけたる提灯にて一行を迎へたるは、安藤家の使にて、先きに立ちて余等を導き中新田なる全家へ着く。ここに一行は厚き欸待を受け、おのゝ物語らひなどしつ、十一時過ぐる頃寢に就く。

明くれば朝風涼しげなり。兩公子には腕車にて御着あり。由て一同は草鞋靴を穿ち、松林に入りて落葉搔きとなりぬ。案外の獲物に雀躍りするもあれば、皿大の眼して取れざるを咳くもあり。山中の樂み盡くる所を知らず。

歸れば乃ち紫栗紅柿山の如く盛られて盆にあり。衆嗷然蟻の甘さに

就くが如く、乍ちにして山を空うす。ろは坐して食つたからだ立て食へばいゝと言ひ出でたるに、一同抱腹せり。次で茸飯を饗せらる。

やがて一行は庭前に於て撮影の後、公子には腕車にて御歸館あり。山谷相馳せて田疇次ぎ、馬橋、南花島、松戸みな昨の如く過ぐ、渡頭の夕暮は又格別にして、さまざまなる船の帆を晚風に孕ませ、遠く夕陽を帯びたるの景、晝も成り難し。

江南何處雁聲寒、人立白蘆紅蓼灣、山影水光秋似掃、片帆斜帶夕陽遠。

之れより金町新宿を過ぎしは夜に入りて後なり。再び引舟通りの長提を辿るに、早や足は半ば感を失ひて、杖に縋りて纒かに歩武を移しつゝ、遙かに遠村の燈火を望み、顧みて瘦影の地に印せるを見護

り、心細くも歸り來れる頃は、河水寂たり、枯柳風に鳴く。

月に叫んで過ぎ行きしは一行の賓雁か。さりとては小夜更けにけん。『この夜ふけぬしづが藁うつ聲さむて雁が音さむくわたる頃かな』枕橋を夢のうちに渡り、吾妻橋のなつかしき夜景色をあとにして、銀座の大時計の下に來りし頃は、車馬の聲とぎれ〜に聞ゆつ。

花笠日記

七寸の青鞋に足を固めて、かひなくしく身つくろひせし數名の同志が、新橋停車場に集りしは、恰も庚子の如月廿五日、車馬聲絶えて、星斗獨り爛たるの半夜なり。待つと久ふして六人となる。十一時出發、高輪を南へ波しづかなる品川を過ぎ更に一友加はる。こゝに同勢七人、放談快語、大森に至る。沖に眠れる漁火の影も今は光なく、孤驛蕭々として六郷の清流を渡る。易水寒き荆軻のうれかわらぬか、

壯士三人、余等に混じて橋錢を胡魔化したるとは、神ならぬ身の知る由もなき、後より來れる一人が、番人との對決苦心左ころと、待ち設けたる六人は、橋の袂に佇みて様子を問へば、意外の好結果なるに、首尾よしと打喜こび、こを手始めに笑語續出、更に勇氣を鼓舞して進む。されど睡魔頻りに襲ひ、寒風骨を砒するかと疑はれ、或は薪に臥し、或は軒に佇み、鶴見にかゝる折は一痕の片破月おぼろげに海より出で、人かあらぬか、黒影いくつともなく重なり合へるは、是れぞ是れ余等が人家の軒端に横たはりて、假り寢の夢を結ぶ一場の奇觀なりける。

晨雞一聲の曉を鳴いて東天白み渡れば、彼の黒影はむくくと起上れり。今更の如き冷たき空氣に目は冴えて、神奈川の驛に入る。海岸に立つて眸を凝らす、東天忽ち紅を潑して、光彩陸離の銀波を盪

かし、帆影黒く山影紫に、天地茲に新なり。瀨氣に撲たれて去りあへぬ余等は、更に横濱に至りて停車場の一室に入り暖爐の前に身を投げかくる迄は、手は痺え果てて曲ぐるよさへ叶はぬに氣付かざりき。

街の盡くる處一亭あり。盛んに啗ひ盛んに放語し、胸中更に藩籬を置かざる一行が、迭みに牛鍋をつゝき合ふ樂在其中と、昔し孔子が言つたかどうだか、そんなとには一向頓着なき我武者連、氣焰の高きこと萬丈、諧語一番笑聲四隣を驚かす。

亭を出で、川に沿ひ、南して磯子に到る。芒鞋踏み遍らす隴頭の雲花外の花探るてふ士人士女が、衣香釵影の間を貫きて墜道を潜る。光風和を扇ぎて、一片の白雲本牧の彼方に懸り、富岡の鼻に至る一帯の春灣、風景描くに似たり。杉田村に至る、老樹槎枒偏に春に魁

けて異香人を撲つ境已に清幽、加ふるに七分の梅花を以てす。只俗客群集、歌舞泥酔の狂態を爲すもの厭ふべし。

仄徑斜に村南村北と縫ひ、圃として梅ならざるはなく、梅として花ならざるはなし。常法寺に照水梅あり。老幹蟠屈、千枝皆地向ひ重瓣淡紅、宛として仙女の風姿あり。これ杉田梅林中の巨擘なるものか。又雙龍梅あり。

寺門を出で一葉の舟を賃ふて乗る。滿帆薰風を孕み得て、舟走ると矢の如く、左右の峰巒指顧に従て變じ、衆快哉を稱す、轉瞬の間一丸氏の撮影に入る者も幾何ぞ。横濱に着し徘徊少時、鐵車を馳て還る。

孤鞍駄夢踏霜行、
白葦林中古驛程、
知有人家隔溪在、
板橋殘月乍雞聲。
(長尾秋水)



落葉集

土筆つひし

いつこもれなし春のいろ、

むかしの夢のあとへは、

水は今なほ語るなり。

霞さまよふ小野の里、

かなたこなたの森かけに、

茅か軒端も見えかくれ。

思へは君ともろとも、

花おふ蝶とたはれしも、

このわたりにてありけりな。

かたくとちぎりし花衣、

やかては通ふ秋かせに、

ほころひろめし藤はかま。

げに情なの人こゝろ、

世をうくひすの鳴く音のみ、

われと同じくかこつらん。

花燃ゆる野になにとてか、

仇なる塗をつむならん、

心つくしのあるものを。

鹽焚く海人

寄せてはかへす白なみに、
ぬる、袂もほしあへす、
風いとあらし荒磯に、
塩くむをみなのありにけり。

家に病みたる夫つとゆるに、
うるし三人の兒ゆるに、
なれぬ手業にたくしほの、
からき浮世をわたるかな。

くみてははこびはこびては、

またくむわざの日ねもすに、
かひなはつかれ氣も落ちて、
なくさむすべも波間なる。

人目に見えぬ沖の石、
かわく間もなきろでの露、
寄する潮路の一とすぢに、
たゆまずやまずつとむなり。

通ふ千島の聲さねて、
こがね碎くる月の夜は、
破れし筥屋のかちまくら、
ねざめのとこや寒からん。

樂天地

おどろの籬くえはて、

月もる擔の板しきに、

かたはかりなる菰しきて。

かくても人や住みぬらん、

藁うつ音のとたねして、

曉ふかくきこゆなり。

落葉さひしき夕暮は、

芭蕉もる燈のかげうすく、

文よむ童のこゑぞする。

啼鳥歌時山寂々、
野花殘處月蒼々。
(李紳)



晃山紀勝

都門の紅塵に懊惱せし中を抜けいで、しばし山紫水明の境に放浪せし身の、にはかに吟骨新たなるを覺ゆるもをかし。某のとし夏のころ、三日といふに、母君の輿を奉し、草枕引き結びつゝ、晃山に遊びぬ。笠間の里はほのかにて、烟雲佐白の山を繞り列車より見るに形いろゝゝに變るながめもありぬ。左右の景色に見とれてあるに

七十路にあまる老翁

の近う寄りて、母君と打語らひぬるに、誰かどうち見やれば、こは幼き頃余をはごくみいたはり呉れし婦ひとの父なる翁にて、今は安けく世を送り、こたび温泉に老後の身を養はんと、那須へ赴くと云ふなる。これかれ迭みに懷舊の涙に呉れぬ。小山にて別れを告ぐ。

宇都宮に着くころ雨いたく降る。更に日光線に乗移る。地はやうゝ高くなり行き、麓の村には雲重なり合ふて見ゆ。今市より翠嵐滴る許りの杉木立、街道に沿ふて立てり。四時日光驛につく。こゝに風水子雨を冒して迎ふ。久瀾を辭するも埃たで先つ宿に導かる。夜は別後の經驗話しに頤を解き、

他郷の情味

掬するに餘りあり。一燈盡きなどするも話しは盡さず。軒端を叩くの雨聲夜と共に深し。翌あけばの、空濛々として、主人今日も雨ふらんといふ。折々雲の絶間より、

黒髪山の髻

を見れば、すがたは見ぬす。瀧のあたり氣つかはしきものから神橋

をわたる。朱欄燦として碧流と映じ、水烟さつと立のばれば飛沫白玉を躍らし、盲然として美人簾を捲て、輕羅をかつきたらんが如し。

含満が淵

に至る。地藏尊幾十基となく並び立てり。所謂弘法筆擲げの「含満」の字を見る。急渦湍湍轟然として恰も奔馬の如く、覺えず足の震はれて、纔かに頭を伸ばす。しかも屹乎たる巖角毅然として少しも動かす。あゝこの屹乎たる斷崖ありてころ、始めてこの急渦激湍活動の妙を極むるを得べけれ。余れ養氣の法を悟りぬる哉。

路岐れて山中に入る。山がつの朝夕なる岨路を上りつ下りつ、裏見の瀧にいづ。松栢年ふりて苔なめらかに、四境寂寞、心先つ澄みゆくめり。崖をめぐれば、げに飛泉百尺の絶壁より懸りて、瀑背より見るべし。山風憂として至れば、満溪の飛霧斜めに衣袂を吹き

青葉みな一齊にうごく。日光の山たる、奥に入るに従ひ天然の絶奇愈々巧を盡し、靈秘益々多し。茶亭に憩ふに、老翁髡山の名華を賣る。嵐氣骨にとほりて、身は己に、

山中七月の秋

の感あり。

棧道雲に隣りて林中を分け入れば、泥途靴を没し、やうく馬返といふに着く。こゝよりは爪先き上りとなる、乗り來れる馬を返すなりとか。されど聖世の今日にては、自由に馬も通ふことゝなりぬ。大谷川の清流は瀟然として鳴り人語を亂る。劍が峰より急坂を攀ち中の茶屋にいたる。阿巖の瀧ほのかに青葉がくれに見ゆ。野夫馬を曳て上りゆく後よりは、貴夫人の山駕籠に召されたるが、樹の間にしばしやすらふ。九十九折の山道を登りつむれば、やゝ平坦なる處

にいづ。只見る、

華嚴の瀧

直下して七十餘丈の瀧壺に水烟立てり。岩燕にやあらん飛ひかふ様面白し。瀧の壯嚴無比なる、げに華嚴の名實相副ふものと謂ふべし。しばし見てあるに、身は次第く瀧の方へ引寄せられて、宛ら白き綿を切て投ぐるが如き間へ捲き入れらるゝ心地し、恍然欄にもた

る。
瀧より西すると未だ數百歩ならず、中禪寺湖畔に出づ。男體山突几として湖面に鑑みし、山光水色真に

天外の想

あり。白雲搖々としてゆるく山巔を繞れば、散じて消ぬ、消ぬてまた合す。雲中の旅寢ぞあやしくも妙なるものなる。中宮祠に珂水子

を訪ふ。清風湖面を渡つて、夏扇自から忘れらるる處、往を談じ舊を語り、更に後日を期して別る。三時山を下り、再び馬返に出づ。余は母君に後れて山中に分け入り、奇を探り幽を討め、暮色蒼然たる頃日光にかへる。この日風水子宇陽に赴く。

五日天氣朗かなり。導者に導かれて神橋を渡り、東照宮にまうづ。宮柱ふとしく彩欄さらびやかに、門廡殿廊みな貴とき金屬を鏤ばめたり。わが國唯一の美觀と稱するも宜なるかな。

朱の玉垣

に立ちて、千歳の下當年家康の大業を忍ぶふし少なからず。本社、大猷廟を見果ててかへる。

午下鐵車に乗じて歸路につく。

板溪奇景誰能畫、
白日青天風雨聲。
（緒方直造）



春晚

花かど見ぬし空曇り、
けふりになひく青柳の、
かげより里は暮れろめぬ。

まぐさ刈るてふ賤の男も、
ひと日のわざをなしをへて、
おのが家路にかへるなり。

破れたる橋のみぎはには、
水のひびきも鳥の音も、
暮るる春をや惜まんに。

今かかへりし山僧の、

影も霞に消え入りぬ、

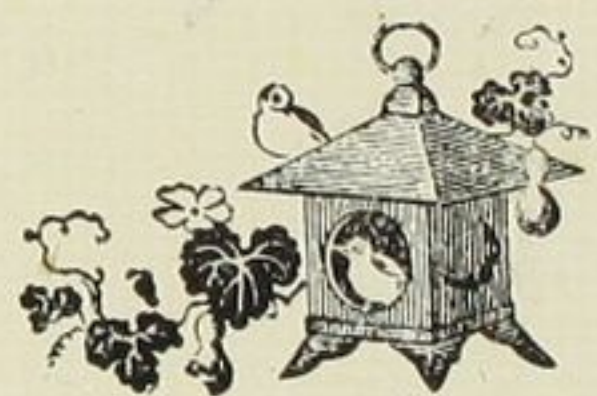
いつこの寺とわかなくに。

閑林獨坐草堂曉、

三寶之聲聞一鳥、

一鳥有聲人有心、

聲心雲水俱了々。



殘んの月影

一夜、夜更けて泉岳寺の門を叩く。木魚しきりに夜を深めて四邊の萬籟を絶ち、梟聲樹下に落ちて月色青し。首洗ひの井に手を清めて墓畔にイミ、瞑目沈思して赤穂義士の跡を吊ふ。

時は維れ元祿十四年三月十四日、勅使江戸へ下向の際、殿中松の廊下に於て、日來の無念一時に發し、遂に忍びんと欲して忍ぶ能はず白刃自から室を脱し、吉良上野介の頭願目掛けて切付けたるも其甲斐なく、身は狼藉の咎を以て死を賜はりたる、淺野内匠頭長矩が遺臣ぞろも不幸なる。民榮え地富めれりし赤穂の城地は削り去られ、朝夕なれし郷里を去つて漂浪の身となり、剩さへ繼嗣と仰ぐ弟大學藝州に禁錮せらるるに及んでは、平生苟も祿を食むの士、主君が當時の鬱憤を懷ひ、奮然涙を揮て俱に天を戴かざるの誓を復せんと

を誓へり。

百四十八

是に於て赤城の義士迭みに約を固め、肉親と雖も敢て之を漏らすとなく、各々氣脈を通じて相寄り相扶け、事を全うせんことを期せり。されど滿腕肉動くの客氣に馳られて、動もすれば輕妄の舉に出でんとあせる壯士の者を、常に鎮撫統率せる大石良雄が深沈宏量なる、其人物と反映して、優に一世の人傑たりしを見る。

同盟は愈々結ばれぬ。心ぞ赤き紅葉の、霜と消ゆべき身ながらも、都の名残りをしまれつゝ、瀬田の長橋風寒さ十月の初めつかた、東海道を駕籠にて上り、各々姓名を變じて敵情を窺ふ。其の苦心慘憺も如何ばかりぞ。昔しは豫讓炭を呑み身に漆して、尙且つ目的を遂げ得ざりしを、さらでだに油斷なき吉良の一家に近づきつゝ、四十七士が日夜膽を嘗め、心ひろかに期の至るを祈り居る、其間の深

謀遠慮なる、用意周到なる、人をして嘆賞措く能はざらしむるものあり。何ぞろれ義に赴くの切にして身命を抛つの輕き。

時なる哉、十五年十二月十四日、鐵巾衷甲、黒白一双の装束に身を固めたる四十七人、上野介が邸内に闖入し、奮闘直進遂に義英の首を得。感喜雀躍之を主君の墓前に手向け、ここに年來の宿志を遂ぐ越えて翌年、細川邸に於て法を以て糺彈せられ、從容として義に就く。始めは處女の如くにして終りは則ち脱兎の如し。一片忠誠の動く所、壯烈千古を空ふす。

嗚呼星霜二百歳、今に至て世人に記録せらるると昨の如く、童幼此の談柄を聞く毎に、感激暗涙を催すに至る者、豈に一道の正氣天地を貫くものあるを以ての故にあらずや。義士の名殆んど四十七士の専有物となれるが如き觀あるも曷ぞ偶然ならんや。

百四十九

元龜天正以來武を偃せて、民漸く太平に謳歌せんとするの時、この一擧の如きは、萬人の耳朵に警鐘を加へしが如きものなり。あゝ、今や俗を易へ大義地に落ちんと欲するの時、人は皆義士の名を口にするも、其心事の皓潔を掬せんとするの士稀れに、滔々として不知不識社會裏面の悪弊に走するを曉らず。適々大義の何たるを説き、名分の重んず可きを言へば、人は狂を以て之を目す。これ時勢の潮流は水の流れと共に、挽回すべからざるものか。曰く人心の刷新に在り。正義の擴張に在り。

悵然として苔蒸す中に立ならぶ義士の墓前に、止め難き暗涙を掬すれば、残んの月影欄り雲間に冴え行けり。

英雄禍福呼誰問、

白骨不言殘月沈。

(緒方直清)



精神の修養

百五十二

『浮草や今日は向ふの岸に咲く』人生測る可らざるもの多しと雖も、精神の安固ならざる程危きものはあらざるなり。精神安固ならざれば一定の意志なく、一定の意志なければ所信深からず。所信深からざれば事を成し難し。左抵右梧、浮々泛々として迷へると、恰も水に漂ふ浮草の、處定めず咲き出つると同様。磊塊胸に横たはる七寸の腸、一片の精髓を認むると能はざるに至ては豈に憐むべきの至りならずや。

世人は迷へり。根本其何れにあるやを知悉せずして、漫に四圍の顔色を是れ顧慮し、前詔後諛、唯た抵觸せんことを恐る。天下の大事を托して本末を繚亂せしむる者、此輩者流に非ずして誰ぞ。

世人は悔へり。姑息と儉安の如何に一身を荼毒したりしりを。嗟す

一宵の残夢空しく青春の好期を逸し、務むべきの時に務めざるの悔悟に逼られて、九腸方さに寸断するものあらん。半生の心事已に非なり、孰爲れぞ其れ勇往直進更に之を挽回するの機運を見出さる。

世の具眼者にして、動もすれば失路を免れざると尙ほ斯の如し。矧んや胸中一介の資なき浮萍的輕薄男子に於てをや。曰く是れ精神の修養に於て缺くる所あればなり。

然らば一步を進めて、如何にして精神の修養を學ぶべき乎。必ずしも學問に讀書てふ意義のみを有せしめざれ。日夜目に見、耳に聞き、心に觸るゝ所の者、皆な最大なる活學たらずんばならず。此を用ひて彼に用ひざれ。由來精神と氣力とは相關聯す。盤根錯節は是れ好個の師友なり。心神の練磨とは決して偶然得るものに非ず、幾たび

か死地を踏んで来る所の光明なり。
天地の間、滄海は限りなく、日光の光復けし。之を無色に見、之を
無聲に聴き、冥々裡に一道の真理を點契するの時に於てこそ、渾然
として融和し、釋然として解脱し、變通自在一種靈活なる妙機を悟
入し得んなれ。

嗚呼滔々たる世路に立つ、先づ精神の修養を懈るべからず。少くと
も社會の潮勢より一頭地を挺ぶるの心眼を有せざる可からず。水火
劍戟尙且つ避けざるの決心なかるべからず。男子事に當て身を處す。
滿腔溢るゝ許りの熱誠の立脚點に最後の所信を貫徹する所あれ。

一穗寒燈照眼明、
回首知己人已遠、
世難多年萬骨枯、
年如流水去不返、
邦家前路不容易、
山堂半夜夢難結、

沈思默坐無限情
丈夫畢竟豈計名、
廟堂風色幾變遷、
人似草木爭春榮、
三千餘萬奈蒼生、
千岳萬峯風雨聲。

(木戸孝九)

函山一夜

蒼穹の星影漸く落ちて、東雲しらのめの空は紫だちぬ。十月廿五日の天は將に曉ならんとせり。新橋停車場の電燈影淡き一室に、三五集り來り、今日の清遊を語り合ふ同窓の諸士。やがて名古屋行列車に搭じ。

七時廿五分出發

す。愛宕の搭影朝霧のうちに行を見送り、品海の清波旭日を浮べ來て、宛然銀を流せるが如し。八時四十分横濱に着す。大小の船舶帆檣林立せるの景を、斜に瓊窓より眺め、程なく程ヶ谷も過ぎ、曰く戸塚、曰く大船、此山凡水俗の間を氣車は黒烟を吐きつゝ走る。唯程谷隧道附近鐵道複線工事に忙しきを見受けぬ。

藤澤に至て富嶽扉顔を露はし、今日は殊更靚粧を凝して、幾多の女官とも言ふ可き群麗を左右に侍らし、嫣然として東海に立てる姿い

と氣高し。衆壯絶と稱す。平塚、大磯、國府津の海岸は一碧繪の如し。是より稍々丘陵起伏、地概ね沙質にして多く桑柘コウシヤクの植ゑられたるを見る。十時四十分山北に着す。こゝにて首尾に瀛關車を附し、燈を點じ、足柄を越ゆるの準備を爲し、五分の後發車す。勾配非常に急にして、一條の棧道は山の崖に通せられ、此強大なる蒸氣力ならではと思はれぬ。河内川『酒匂川の上流』を渡りて、例の

黑白世界

に入る。隧道を通ずる者大小六。上は則ち絶壁千仞の山壑、下は則ち水勢迅激の河内川、川の水石に激して濺然聲を放ち、曲折委蛇斜に澗底を穿ちて去る。列車の川を横ぎるもの七回、亦以て其如何に山水の相逼れるかを想ふべし。疇昔列車通過の際過ちありしを以て、尙線路工事中に係り、尤も注意を加へ徐々として進行す。かくて十

一時十分小山驛につき、全三十五分御殿場に下車す。今まで山に包まれしが急に

四望豁朗

となり、頓に心伸ぶるを覺ゆ。不二峰は額に當りて、頂より腰に至るまで白雪を以て蔽はれ、八朶芙蓉の觀實に本邦無二の寶と稱す可く、白扇倒懸東海天、其の麓脚の遠く延て、今余等が立てる邊まで來り覺ゆず魂飛ばんと欲す。茶亭に就きて、茗を殮ひ飯を喫す。既にし出て出發、小徑を索めて田家蕭疎蘆芽茂れる間を辿り、漸く爪先き上りとなる。崖腹に走れる樵徑恰も羊腸の如く、左右の峰巒連嶂をなして、路は次第に嶮峻となる。背汗衣を霑ふし、呼吸過激、衆相呼て互に勵ましつゝ、之字狀を爲して上る。四邊の樹葉や、秋色を染め、黄紅濃淡參して、巧に自然の繡を織る。顧みれば富士の全身雙眸

に入り、遠村近落恰も碁局に白黒を撒きたるが如く、纔に縷々然たる人烟を認む。杖を停めしは佇立して天地の大觀と默契しぬ。

一時半頃峠の巔に達す。此處は

乙女峠

と稱するものにして、傍に茅亭あり。眺望の絶佳なる、前には富士、後には箱根諸山と蘆の湖とを併せ見、右に金時山を控ゆ。山姥の故事など思出されぬ。見來れば諸州の山河眼下に攢りて、予等の足は今俗界をを抜くことも幾千尺ぞ。大凡足柄箱根諸嶺は富士山脈より分れて別一派を爲し、蜿蜒重疊到る處に嶮山を突起し、古來より關東の嶮と稱せらる。憶ふに新羅三郎が、八幡公の邊に朔北に従へるを慕ひ、遙々花の都を東奥に下るの途次、舊師の一子時秋が衷情を^{もは}怜み、足柄山頭月明かに、松籟聲を潜めて更深きの夜、一曲の

簫音腸を断つが如く、共に千歳限りなきの別れに泣きし者、誰か公の高義を記するか。凄々たる草木有り、誰か公の孤忠を知るか、皓々たる明月有り。而も明月や草木やもと無情の者、千年の草木、千年の明月、今尙當時を緬懷して恨惋の情に堪ふるや否や。

良位に當て空中一朶の雲あり。有の如く、無の如く、芙蓉峰の背を撫して裾野の方に流れ、遠く淡鶯の彼方に搖曳するなど、天地は心神飄然半ば體を離れ、半ば雲外に飛ぶの頃、汗に染みし征衣冷やかなるに驚き、起て衆と共に魚貫して下り、黄茅白草の廣野に出づ。所謂牧場なり。肥馬秋風に嘶て、犁を肩にせる村婦あり。歸牛水を飲んで、牧笛を鳴らすの童子あり。一二の人家其間を綴り、三町五町にして柵を設け、牛馬皆自在に走奔す。行くところ許、脚頗る疲憊し、加ふるに腹空しきを告ぐ。忽ち湖水を得たりと先發隊の喚ぶに勢づき

馳せて湖畔に至る。即ち姚子村湖尻ウミシロなり。舟ありて待つ。

舟中の蘆の湖

櫓聲軋々舟岸を離るれば、兩岸の山影一時に動き、夕陽に映帶せる紅葉湖面に涵ひたつて、幾千尋の龍宮界に、さながら仙女の裳もすてを洗ふが如く、四顧の翠巒眉宇の間に迫りて、清淑の氣更に騷人の雅懷に入り、所謂詩神此間に徜徉するかと疑はる、舟子曰く、此湖長二里十三町、幅數町を參差し、周回七里深さ四十六仞と。其左に峙つは二子山、駒ヶ岳なり。右に連なるは日金山なり。此絶美の景に對し、二隻の短艇に乗れる余等は、舷を扣きて吟嘯す。斷崖千尺山高く水清く、若し之をして月明の夜ならしめば、豈に坡仙が後赤壁に似たるなきか。遮莫河山空しく古にして、人の榮枯常に今日ならず。魏の武侯が嘗て西河に浮んで、嗚呼美なる哉山河の固めと嘆せし時、

吳越が人に在て嶮に在らずと言ひけん故事をも憶起されて、轉て今古世事の轉變に腸を斷ち、悵然として此海拔幾千尺の大火山湖に感を惹く折しも、舟子南を指して人烟の騰れるは箱根驛なりといふ。衆等しく眸を轉じて其絶景を稱す。時に暮靄うすく山脚を掠め、纔に一角を露はしたる芙蓉も今は容を潜めて、冷氣人を襲ふ。箱根權現祠の森蔭を遙に拜し、箱根離宮の壯觀を眺めつつ、五時三十分、燈光水に閃めく頃、箱根の石内彌平太氏の家に着す。既にして後れたる者亦だ至る。一浴勞を醫し、互に談笑しつゝ、夜の更るに及び、衆皆枕に就く。旅魂は忽ち飛んで蘆の湖上の扁舟に浮ぶ。

翌朝午前四時、噴泉の響きに夢破れて目覺むれば、已に起出で、結装する者あり。健脚家の諸氏曉を冒して、箱根權現に詣づるなり

いふ。やがて曙色はのくと遠近の峰に光添ふれば、遠近の峰は翠裳を湖面に照して粧を凝し、雲烟模糊の彼方に立てるは、尙ほ翠帳の裡に後朝ヨメグの怨あるが如し。富嶽は影を水に涵し、所謂

逆さ富士

なる者を現出し、奇觀名狀すべからず。室の一隅を顧みれば、楣間に佐野常民の書あり。扁して『湖心浮嶽』といふ。眞に奇景を道破し來て味あり。

箱根驛は元箱根と稱し、往昔五十三次の一にして、今は蕭條たる寒邑、夏時の來客が纔に節を停むるのみ。朝餉終て七時十分出發。屏風山の蔭を踏み、離宮の前を過り、杉の木立いと物凄き峽路に出づ、是れ即ち杉八丁にして、

箱根古關

のありし所、山と水と相逼りて要害を爲す。むかしは小田原城の外廓として、優に關八州の鎖鑰を爲し、緩急事有るも、常に此鎖鑰に據て兵を進退す。彼の天正中關の形勢孤に、戌卒叫ぶの日、一擧して北條氏を滅はせし猿面郎も、實は頗る此險要を危みしなり。落葉時に衣を撲ちて、一鳥幽かに鳴く。古關の曉色何ぞ其れ征人をして無限の感愴を増さしむるの深き。

權現一の華表を入り石燈を拾ひ、磽确たる樵徑を上りつ下りつ、駒ヶ岳の右、二子山の左を過ぐ。二子山は形貌酷た肖て、相連なると雙兒の如し。此は西軍の北條氏を討つや。大石を投じて敵を窘めし處といふ。精進池。齋の池。塞の河原など過ぎ、行くこと町許、大佛像あり。弘法大師の塑する所なり。又相双びて二の卵塔あり。雨鏤霜刻、碧蘿石を蝕して榛莽人よりも高し。是れ曾我兄弟の冢なり

と云ふ。吊し了て、直ちに雞鳴狗吠別に一幽境を劃する山下の村に着く。硫氣遠くより鼻を撲ち、問はずして其温泉地たるを知る。即ち蘆の湯なり。一丘に上て眺矚すれば、湘南の山水遠淡近濃、宛として畫中に入るが如く、心神暖然たり。邱上恩人碑あり。雨森宗直の建つる所。既にして坂路を下るに、磊砢たる頑石靑鞋を噛み、稍慎まざれば躓く。二軒茶屋に小憩し、是より楓錦柿緋の林間を折れ底倉に出づ。底倉は宮の下と連り、浴舎軒を並べ、清淨宏麗、浴客常に絶えず。加ふるに山光水色の秀美を以てし、人をして別天地に遊ぶの感あらしむ。風一たび山頂を掠め去れば、嵐氣斜めに家々の軒楹に入る。人は皆清淑の氣を吸ひ、山は皆清淑の氣を吐くものと謂ふべし。往昔新田義隆義兵を陸奥に擧げて、事利あらず。逃れて底倉に隠るるの日、會々間者の告ぐる所となり、遂に浴室一滴の露

と消えぬ。後人碑を此に建てて、其靈を吊ひたり。此地挽物細工多し。

一縷の白雲

時に明星ヶ嶽を繞り、鼻々として亂れて千絲となり、烟となつて飛散す。變化倏忽、魂を宇宙天外に誘ふ。太平臺を経て塔の澤に出づ崖轉じ路廻り、見上れば千仞の青障削立し、下を瞰めば水聲瀧々として心耳を樂ましむ。即ち早川なり。蘆の湖より溢れて此に來り、幾多の急瀬と棧橋とを過ぎ海に朝す。湯本に着きしは十二時に近き頃なり。

午餐の後、一行の半は鐵道馬車に乗じ、半は徒步す。馬車線路に沿ふて歩すると二里。南方石垣山を隔て、石橋山を眺む。治承中源頼朝大庭景親と接戦の處。かくて小田原に着し城址を訪ふに、松は摧か

れて薪と爲り、堤は鋤かれて畑と爲る。只殘礎故壘の今も昔の色を帶ぶるに由てそれかと偲ぶるのみ。天主跡に大久保神社あり。藩祖大久保忠世を祭る。傍に彼の有徳家を以て有名なる二宮尊徳翁の報徳神社あり。杖を牙城の門礎に樹て、四望すれば、右に箱根の險あり、左に鎌倉の海あり、

地勢嶮要

天下の形勢を眼下に瞰る。山陽が所謂關東八州は天下の胸腹なる者、沃野千里、山を鑄、海を煮、以て武を用ふるに足るの地なり。憶ふに當年北條早雲が赤手風雲を捲くの快腕を弄し、一舉此城を奪ひ、數世兵馬の權をその掌中に攬りし所以の者、決して偶然にあらざるなり。城を下りて小田原幸町の松原祠に謁す。日本武尊を祀る此にて徒步せんか、馬車にせんかなどの小田原評議も出でしが、か

ばかりの道程何のことかはと、由來難に當るを屑しとする鐵腸男子
蘆子川の細流に草鞋を濕し、幡より酒勾川さかの長橋を渡る。川は沙石
多く、數系の細流蜘蛛手になりて流る。酒勾川よりは海岸一帯、

松青く沙白く

松韻濤聲の間、驛馬の鈴の音微かに響くなど、ろろ當年の五十三
驛時代の風物を想ひ出て、折から來れる馬車に尾して國府津に入る。
時に二時五十分。

夕陽沈まんと欲して晚烟江島の邊に迷ふ。海濱に踞して滿目の風光
を吟懐に入れ居たりし余等は、午後五時上り列車に乗じて國府津を
發し今は四邊の風景も闇に包まれたれば、窓を推すも物憂く、列車
の一隅に横はりて、函山一夜の快夢を繰回しつゝ、八時十分東都に
還る。

當年意氣欲凌雲、

快馬東馳不見山、

今日遞途春雨冷、

盤車搖夢度函關。

(賴三樹三郎)

旅づこ漫録 (戯稿)

百七十

はしがき

箱根八里をはち唄で跨ぎ、大井川に尻からげせし膝栗毛の昔しは知らず。今は一日千里の汽車旅行、朝風涼しき白河の關を、曉の星影に見たるの人も、はや夕には西の空に入りて、時候の挨拶まで、昨日とけふは打て變るも珍らかならず。隨て所替れば品かはる、難波のあしは伊勢の濱をぎ、其の濱荻を一枝二枝折り添へて、所に名たたる名物を數へあげ、名所のしをりとなさばやと、一つ二つ拾ひあぐるなり。其知らざるが數多きなかに誤りも少なからざるは、あしのかり寢の一夜ゆるになん。

(東都名物) 先づ花の都より指を屈せんに、上野、愛宕は言はずも

あれ、墨田堤の雪のながめは、見るから遠しらくて、はせをの「いざさらば雪見にころぶところまで」十里の長堤を轉げて見物するは、更に興あるべくもや。堀切の菖蒲、龜井戸の藤は初夏によろしく、龜井戸には『くず餅』てふ名物あり。

芝浦は潮干狩半日の遊に滿籠の餌物あるべく、瀧の川の紅葉には林間酒を暖むるに枯枝を折る位は出來べし。月は秋の高輪によろしく、花は春の上野よろし。隅田川は『いざこと問はん』の都鳥にありて、今も『言問團子』は人の賞味する所なり。木母寺は吉田の少將のわすれがたみ、梅若丸の故跡。向島の百花園は四季折々の草花を集め山野自然の風景をしつらへ、『お茶さこしめせ、梅干も候ふぞ』と榜せし主人の風流、此を過る雅客の足をどいむとか。有名な臥龍梅は龜井戸郊外、竹籬疎々たる清香庵にあり。歸途庵に入り

て梅子を購ふ者多し。

深川萬年橋の邊には、芭蕉庵の舊址あり。『古池や』の名吟に入りし古池の形今に存すと。

淺草にての名物は公園の玉乗りと年の市、仲見世の『雷れこし』と仁王門の鳩。

團子坂の菊見には、必ず『藪ろば』を忘れ玉ふな。

なほ東都の名物としては、錦繪と『淺草海苔』砂ほこりと書生の往來。近郊にては、目黒に『栗めし』あり、『筍めし』あり。比翼塚は粹士の必ず吊ふべき所。玉川は絨を以て著しく、下流には矢口の古渡あり。大森は麥藁細工。川崎は『梨子』、『よねまんぢう』

(日光) 盆、『日光海苔』さてころ海苔とは海より取れるものとは限らざれ。『唐辛』と『羊羹』は『プラス』『マイナス』にて、差引き『ゼロ』

となるべく、大谷川の清流を水力電氣にかへ、東照宮の金碧精彩を見て、始めて『結構を口にするを得』るなど、名物といは言ふ可し。『江島』貝細工、辨天の龍窟、『榮螺の壺焼』、おまけに清風萬斛。三浦の山頭玉免躍りて、金鱗湧くの時やろもいかに。『名月や』と一句やるのは、こゝらわたりなるべし。

『箱根』『力餅』さんせう魚、湯本細工、蘆の湖面の逆さ富士。

五十三驛を次第に西に、膝膝栗毛を實施せば、今昔の感や多からん。

鎌倉の『海老』は、若きも尙は腰を屈指、「秋の夕ぐれ」の鴨立澤には『あま酒』あり。下戸は大磯の『虎餅』、二子山麓の『甘酒茶屋』を訪ふも妙ならん。小田原には古しへより『海雀』、夢想枕、『漬物』、『外郎』、『透頂香』あり。小田原提灯、小田原評議など、今は名物なりや、否や、知らず。

興津の『鯛』、蒲原の『鮎』、三保の『松露』、羽衣の松は謠曲中天女の
故事を以て名高し。

安倍川には、人口に膾炙せる『安倍川餅』日坂には小夜の中山の『餅』、
の餅』あり。到る處健啖飽くなき吾人の腹を慰するに足る。

屋頭楊柳深々碧、

門外青山冉冉多。



鈴の音

なやむ山路も盡きはて、

唄のふしさをかしげに、

暮れゆく谷の棧を、

荷馬の鈴のこゑかろし。

朝夕なる、手綱だに、

引かる、心ありてふを、

家にははしき我妹子と、

一人の母の待ちてあり。

ゆふべ三島に旅寐しつ、

けさしのゝめに玉くしげ、
箱根の山をこゑて來し、

夢はさすがに残りつゝ。

松ふく風を心にて、

歸りゆくころたのしけれ、

しろげわが駒いさらは、

はやわが里も近かるに。

谷の細道とめくれは、

もりに包まる木下闇、

めくれは里も見えろめて、

馬のあがきのはやさかな。

背戸の柳のろよ風に、

わつかに洩るゝ燈火も、

夕きりこむるくさのやの、

門邊に立ちて待つや誰れ。

看梅不覺昏、 新月隨歸袂、

隔水認吾廬、 一聲聞鶴唳、

(草場船山)



關西めぐり

名にし負ふ金城の一角を、朝靄の間に望み見て、榮黄麥綠、遠く木曾川の下流につゞく一帯の平野を、鐵車に走らせしは、己亥の春四月二十四日にぞある。四日市にて諸處の軒頭旗幟の翻るを見る。未だ五日ならざるにと、奇異の感に打たれ、齋藤拙堂が岐蘇川を下りしも此頃にやと思ひ浮ばれぬ。河原田より鐵路斜に鈴鹿の清流に沿ひ遙かに鈴鹿の嶮嶺をのぞむ。

龜山より一里余奥に、日本武尊の山陵ありと聞く。一劍霜に鳴つて能褒野の露やいかに滋からん。昔しの關所

鈴鹿峠

を穿て山また山の間を進行す。乍ち暗黒と見る間に煤塵容赦なく窓に入り、出つれば白日前の如く、更に突兀たる嶮嶮を現出す。委蛇

たる溪流鏘然として玉を憂するの聲あり。崖の轉合、峽の曲折、一線の兎徑斜めに危梁を通じて樵童互に答ふ。車中の清興涯りなし。見飽かぬうちに車は柘植^{ツキ}にて停まる。こゝは芭蕉翁誕生の地といふ。伊賀越の仇討にて有名なる上野を左に見て、驛を數ふること未だ二三ならずして、

笠置

に抵る。嵐氣窓に入りて、仰げば峨々たる山石峯を擁するが如く、麓脚の里は雞犬遠く聞ゆ。此は即ち行宮の在りし所。あゝ當年北風いたく荒みて、日月の光り薄らぎ、賤の山家にだも休らはせ玉ふべき所なく、心なき松の下露に衰龍の御衣を染めさせたまひし、一天萬乗の君が御事をし思へば、依稀たる千年の山色、滴たるが如きの翠嵐、何れか是れ征客の袖を濡さざるべき。胸裡無限の感慨を載せ

て、嵐車は木津川の左岸を馳す。清流細漣を碎き、烟村の風景描くが如し。

加茂より奈良に入る。三景樓に投ず。其夜三五の月明に乗じて、

古都の月色

にあてがれぬ。所謂公園地に入る。絃聲を賣る者あり。王公夜遊のろれならなくに、月下燭を乗つて哀音を訴ふ。むかし八重櫻匂へりし九重の殿礎に、少女絃を擁して泣くの今宵は、嗚呼ろれ果して浮世の變か。低徊古を懐ひ、仰いて夜烟こむる満都の月影をながめ餘りに情に堪へねば口吟む。『天の原ふりさけ見しは春日なる三笠の山に出てし月かも』。

南都にて名高きは春日の鹿なり。毎年秋に入れば角伐は年中行事の重なる者なりとか。余は導者に導かれ、三笠山を見るに、木無く草

短かし。手向山八幡に菅公の「神のまに〜」てふ楓ありて、其時踞したる石あり。曰く三月堂、曰く二月堂、大鐘、大佛、花の松、南圓堂、北圓堂、猿澤の池、佐保川と古跡の多き見るに堪へざらんとす七堂伽藍は今に存せずといへども、舊都の面目忍ぶふし少なからずとかや。

廿五日浪華に入る。みじかきあしの今は刈り盡されて、長さ煙突の煙りたなびく。これを見そなはさば仁徳の帝はいかに御満足に思すらん。中の島、千日前を見果て、一日神戸に遊び、

布引の瀧

を見る。鷗越につゝく山彙の逼て一條の清泉を吐き、人の心を清からしむ。街を去る遠からず。水落ちて神戸市の飲料となるといふ。生田祠には源平合戦を説く者の、唯一の芳話、梶原景季の籠の梅あり。

神巧皇后釣竿の高麗竹、百度石、辨慶竹等竹樹扶疎たる間に在り。
更に湊川神社に詣でぬ。湊川の

松籟颯々

たる處、曠世の忠靈を吊ひ、坐るに欽仰の情にたへず。平生灑がさ
る丈夫の涙桶公墓畔獨り嗚咽せる人もありき。水戸光圀の建てし碑
は、松の緑りと共に子々孫々に忠義の鑑を示せり。

五月四日京都に遊び、桃源の夢濃かなりし當時の殿上人が、朝夕あ
こがれし倚翠偎紅の境に嘯ふさぬ。東山の麓、鴨川の塘、

山黔く花晶かに

遊人の心を樂ましめ、風や落花を撲つとき清水堂の鐘聲も暮れ、月
や天心にすむの時四條河原の燈影涼し。名區巨利の間千年の舊跡を
尋ね、滿懷の詩興頓に長さを覺ゆ。

三十三間堂に千體の觀音を拜し、智恩院に至れば大鐘目を驚かし、
本願寺の噴水、南禪寺の水路、何れも水力利用に好地勢を占むるの
實を證せり。祇園京極の繁葉は、今も昔に變らずとかや。
翌五日嵯峨に至る。龍門橋を渡れば、茅店軒を並べて御幸餅を賣る。
茶店の少女容姿皆婀娜、朝暮山紫水明の間に起臥する者なり。

嵯峨の奥

に入れば松ふくかせの音清し。憶ふに影うすき夕月夜、長袖紈袴の
殿上人が、馬上遙かに聞きたりし琴聽橋は、今もむかしの松韻を傳
へて、小督の俤のそれかあらぬか、蕭々然たる一道の清音、叢林を
を分け出つれば、碑ありて小督の字を勤す。是より

嵐山

の風景を見渡せば、翠綠滴らんとするが如く、瀟氣人の吟情を撲つ。

所謂三軒茶屋を斜に見て、渡月橋を渡る。水愈々白く山益々緑なり。虚空藏菩薩を出て、嵐峽の幽邃を進めば、碧流奇崑を壓し、山氣深うして所謂『松の尾の峯しつかなるあけぼのに仰ぎて聞けば佛法僧鳴く』の感あり。音無瀬の瀑より數丁、温泉あり。綫の如き石徑を上げば、

大悲閣

なり。楊柳坐るに春風の院を鎖し、梨花暗に夜雨の門を叩く。千年の佛跡愁情を惹くもの、豈に遊子に於てのみならんや。崖を下り、こたびは舟に掉して桂川を下る。對岸の茶婦連りに呼んで客船に在り。山蟬鳴き止んで山更に幽なる處、三軒茶屋に舟を繋ぎ、糗糊たる山影と別れの惜まれて立てり。此の日午下京を辭し、東に還る。知るも知らぬも逢坂の、關路の宿

りや今いかに。石山の一角より湖面の渺茫たるを眺め、日も黄昏が
る頃、

關が原

を過る。満目の風光依稀として却て情を傷ましめ、當年萬馬の聲い
ま果していづこぞ。兩軍の血枯れて草木を染めし者、夕霧こむる斷
碑の間にろれかどぞ偲ばるゝ。轉た『つはものどもの夢のあと』の
感なくんばらず。

半空湧出兩浮圓、
更有伽藍俯九衢、
十二帝陵低不見、
黑風白雨滿南都。
(藤井竹外)



山家の起き臥し

春晚の釣遊

夕陽已に沈んで暮靄四邊をこめ、鋤を携へて歸るの隣童、錡を擔て去る老翁總て晝中獨占の好景。悠々たる春色、獨り晚晴を弄して、柳條影濃かに桃李紅を潮するの長堤に坐して、徐に綸を垂れて待つ。心中の清適何物かまた加へん。既にして一重の白烟村南村北を繞りて鎮守の杜は深く黄昏の色に鎖されぬ。

漁火

平野田疇相連なるの間、一水北より來り、蘆荻の根を洗ひて曲析紆、東に去る。川もと魚介に富む。若し夫れ春夏の交、雨新たに晴れ、河水漲溢せんか、幾多の篙夫篙を焚き網を張りて、石稀に水淺きの

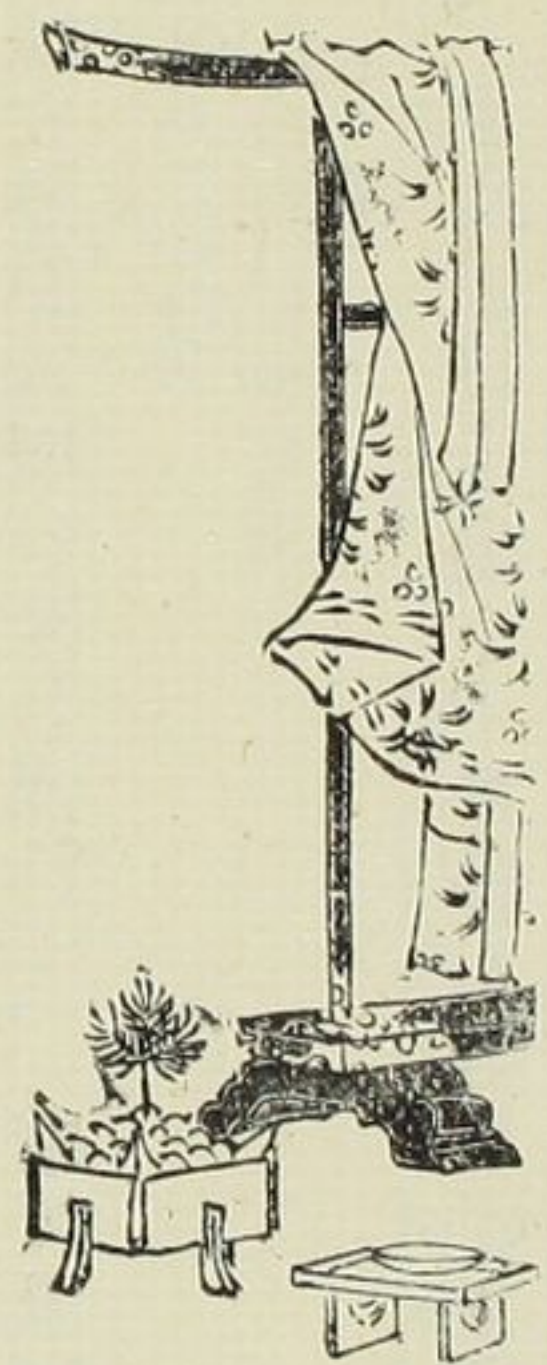
邊に群がつて魚を捕ふ。之を名つけて鵜舟といふ。一蓬一瓢の間、取て盡きざるの妙味あり。遙かに田塍を隔て、二三茅屋の簇立せる邊を之を見れば、漁火幾點竹樹の間を洩れて、暗に風騒の士をして、得意の詩想を烹鍊せしむ。

雨の夜

蕭風梧桐を搖かして、老梟後林に鳴く。月昏く雨しげきの夜、獨り短檠に對して弓張月を讀む。彼の鶴龜兄弟が白刃を執て、深山幽宮血腥き處に、故仇を討つので段に至り、情緒纏綿、人の心に逼つて、凄慘の極、悲哀の絶、覺ゆる浩歎する者之を久らす。乃ち村茗を煮、一酌煨諸を嚼んで獨り沈思默坐す。松籟聲を潜めて、窓を叩くの雨聲もの凄し。正に是れ『山空松子落』の感あり。

月影

日課已に終りて、二三莫逆と互に言論を闘はし、古書を読んで平生の疑問釋け、心洒然として校門を出つれば、秋の日影は山の端に名残り止め、下弦の月、獨り孑然たる瘦影を地に印す。燈火ゆるく木の間を洩るゝ頃、馳せて歸るを常とせり。爾來東都の風物感を惹くもの多し、風夕雨晨、未だ此時の光景を眼前に映出せずんばあらず。



軒の玉水

糸よりかけし蜘蛛のいと、
かたちひろめて昨日けふ、
そほふる小雨しめやかに、
軒の玉水しつかなり。

けさはとたのむ甲斐もなや、
よべより雨のをやみなく、
心にかけてし花ざくら、
色香やいかにうせぬらん。

友も訪ひ來ぬまひるなか、

つれくわふる圓窓に、
なびく柳のさらくど、

雨にうたれて音よわし。

酷憐風月爲多情、還到春時別恨生、
倚柱尋思倍惆悵、一場春夢不分明、

(張 健)



薪ごり

落葉ふりしく山かげに、

松間をつゝる花紅葉、

ふけゆく秋の色しめて。

岨路つたへて少女子が、

峯のをちこちをれめぐり、

妻木あつむるしほらしさ。

姉をたすけて弟も、

なれぬ手業のはかなさは、

つゝれにまどふ手もなえつ。

今ど暮れゆく里の色、

夕告げ鳥を送るらん、

鐘のひびきも沈みゆく。

麓路さしておとゝひが、

かたみに辿る杉村を、

星はさびしくてらしつゝ。

木枯すさふ芽が軒、

夜半の鶴てふ親の身は、

思ひやつれてまぢぬらん。

歳暮の感慨

(明治三十一年の盡日燈下に筆をとりて)

池塘春草の夢未だ覺めざるに、一葉の殘荷空しく秋風を送り、一年の計未だ成らざるに歳已に暮れんとす。歳華勿々、古今歎同じ。人生に於ける行路は猶ほ流水の如し。

熟ら已往を顧みて更に將來に及ばせば、人事の轉合將さに測られざらん。而も社會の大勢は、浩々汨々として絶えず一道の潮流を爲し、明かに國家進歩の氣脉を涵養する者、吾人は歳と共に進まざる可らざる所以を思へば、漏刻の鏘然たる響は、恰も吾人一生の歴史に點を劃するが如きを感じん。節物移りて歳抄冬に窮す。燈火豆の如き殘灯の下、俯仰豈に多少の感慨無らんや。

將さに來らんとする明治三十二年の天地は更に特段なる意義を有す

る者なり。少くとも維新後の我國が再び面目を改む可き時期なり。嘗て描きし内地雜居てふ社會は遠からずして現出せんとす。國家社交上に於ける、人民生活上に於ける幾多の新現象は、雜亂紛糾の間に吾人を眩惑すると無きか。多年叫びし國權の伸長も、滔々捲來る渦流に葬らるゝと無きか。天の未だ雨ふらざるに牖戸を綯繆す。警醒すべきは國民の覺悟にぞある。

一國の消長は一家の盛衰にあり。一家の盛衰は一人の元氣に在り。國民各自の潛勢力は直ちに國家の氣運に關係するを思へば、吾人は豈に懼れて且つ警めざる可けんや。

吾人は多く言ふを須ひず。唯た其精神をして堅實ならしめよ、健全ならしめよ、石の如かれ綿の如からざれと叫ぶ者なり。惟ふに吾人の前途は應さに無數の大艱難ある可し。不撓不屈は唯一の干戈なり。

勇往直進、艱難を師友とするの雅量あらざる可らず。青年時代は彈力時代なり。壓を加ふるも速かに回復するの氣力に富むものなり。屈從凋落は斷じて青年の事に非ず、好機我に在り進んで取る可きのみ。昔は羅馬の該撒馬を留比胡河上に立て、曰く、『骰子投せらる、吾志遂に翻す可らず』と。男兒須らく這般の決心ある可し。決心ある者は行ひ、行ふ者は遂ぐ。斯の如くにして國家の進捗得て期すべきなり。

白駒荐りに檄を飛ばして、青陽將さに轅を回さんとす。鳳曆改まると共に吾人の心意も刷新し、眞摯、高潔、深厚、忠實なる滿腹の赤誠を提げて、光輝ある明治三十二年を迎へん哉。

會心の詩歌

詩歌はひとつ心をたねとせるものなれど、人情の動くにつれ、自然に發するものなれば、人を感動するとも一層強きものなり。たとへば機を離れたる寸鐵の善く人を仆すが如かり。斯れば、其の身其の時に處して、思はず出てしものは一種の方ありて、なか／＼に彼の苦悶慘憺纒かに拈合したるとは、はるかに趣を異にするものぞかし。心を以て心に傳ふるは歌の効なり。是れ古へより詩歌を言葉の粹となす所以にして、人情美妙の作用を此に寓し、不言不語のうち赤心を人の腹中に推し、所謂神來の妙其間に湧くものなり。

伯夷叔齊が首陽山に隠れて、周の粟を食はず、

登彼西山兮、采其薇矣、

以暴易暴兮、不知其非矣、

神農虞夏忽焉沒兮、我安適歸矣、

于嗟徂兮、命之衰矣。

と歌ひしは、餓えて尙且辭せざる二子が高節、超然たるの面影を認めん。

斷崖千尺の赤壁の下、曹猛徳が槩を横たへて、

月明星稀、烏鵲南飛、

遶樹三匝、無枝可依。

と詠せしは、やかて風冷かなる七尾灣頭、杉霜臺が、

霜滿軍營秋氣清、數行過雁月三更、

越山併得能州景、遮莫故郷憶遠征。

と賦したると、陣中の感慨はなほだ相似たるものあり。

戈とりて月みる毎に思ふかな、

いつか我身の上に照るやと。

武田信玄の述懐も、亦這般の消息を傳へたるもの、由來武將が胸中に閑日月ある、吾人の夢想だも及ばざるあり。彼の

馬上青年過、年春白髮多、

殘軀天所許、不樂復若何。

人生は行樂せんのみ、いかで樂しまざるべきと、大平に謳歌せし伊達政宗は、遠く海外に雄飛するの豪懷を有せしに非ずや。

項羽垓下に圍まれて、悲歌慷慨の餘り、歌て曰く、

力○拔○山○兮○氣○蓋○世○、時○不○利○兮○雖○不○逝○、

騷○不○逝○兮○可○奈○何○、虞○兮○虞○兮○奈○若○何○。

歌ふと一闕、喟然として浩歎する英雄の末路、天か命か、寧ろ酸鼻

に堪へざるものあり。

能因法師が歌妙に入る者多し、人も知る秋風古關の歌、

都をば霞とともに立ちしかど、

秋風ぞふく白川の關。

再誦三誦、草長き秋の日に、暮れかゝる古關の下、馬上しつかに埒を超ゆるの老衲が後影、轉た眼頭に髮髻せずんばあらず。

薩摩守忠度は平家の勇將にして、文事のたしなみ淺からず。旅宿の花と云ふ題にて、

行かれて木の下かけを宿とせば、

花やこよひのあるじならまし。

胸中綽々たる風月の樂み、人をして欽仰己まざらしむ。又故郷の花のうたは人口に膾炙せるものにして、

さなみや志賀の都はあれにしを、

昔ながらの山櫻かな。

朝夕なれし都をあとに、西海へ下るとき、一卷の歌集を貽し、身は生きて還らざるの決心にて、

前途程遠、馳思於雁山之暮雲、

後會期空、濡纓於鴻爐之曉淚。

を吟じつゝ、落ち行きしとあり。之とおなじく哀れなるは、韓退之が

潮州へ下るとき、

一封朝奏九重天、夕貶潮陽路八千、

欲爲聖明除弊政、敢將衰朽惜殘年、

雲橫峯家安在、雪擁藍關馬不前、

知汝遠來應有意、好收吾骨瘴江邊。

の詩なり。

虞綸が塞下の曲に、

月○黑○雁○飛○高、單○于○遠○遁○逃、

欲○將○輕○騎○逐、大○雪○滿○弓○刀。

とあるが、全し意を歌ひ出でたるは源實朝が歌に、

ものゝふの矢並つくるふこての上に、

あられたばしる那須のしの原。

何ぞ其れ一に壯快なる。霰たばしる那須原頭、劍に聲ある壯夫が風

丰躍如として、三十一字の外にあらはる。

有名なる楓橋夜泊の詩は、王維の作にして、

月○落○烏○啼○霜○天○滿、江○楓○漁○火○對○愁○眠、

姑○蘇○城○外○寒○山○寺、夜○半○鐘○聲○到○客○船。

とあるは源兼昌か、

淡路島通ふ千鳥のなく聲に、

いく夜ねさめぬ須磨の關守。

とあると、何ぞうれ同巧異曲なる。低誦一番、無限の妙味長く懐に忘るゝ能はざるものあらん。

柿本人丸がうた、

ほのくと明石の浦の朝きりに、

しまかくれゆく舟をしぞ思ふ。

は李白が、

故人西辭黃鶴樓、烟花三月下揚州、
孤帆遠影碧空盡、惟見長江天際流。

とある、何れも別れを惜むの情景並び至り、調に於て弟たり難く、

兄たり難し。

余は最も藤井竹外の詩を愛す。渾然として玲瓏玉の如く、諷誦の間言ふ可らざる趣味ありて存すればなり。今ろが二三を記さんに、花朝淀江を下るの詩に、

桃花水暖送輕舟、背指孤鴻欲沒頭、
雪白比良山一角、春風猶未到江州。

芳山懷古の詩に

古陵松栢吼天鷗、山寺尋春春寂寥、
眉雪老僧時輟帚、落花深處說南朝。

大悲閣に宿せる時、

石泉經雨響如崩、夜對山僧待月升、
春戸不扃風暗入、落花亂撲佛前燈。

正に是れ一幅の有聲畫。

森春濤が短袴琵琶湖畔を過さる時の詩、

水○明○山○媚○入○新○秋、空○際○虹○消○雨○脚○収
多○病○末○抛○江○海○志、八○年○重○上○望○湖○樓。

感慨縦横の詩人が面目忍ぶに餘りあり。

木戸松菊の、

去○歲○王○師○迫○我○境、今○朝○孤○劍○入○他○鄉、
回○頭○世○事○變○如○夢、一○片○依○然○男○子○腸。

は其人物と相映じて、一種の光彩を放つを見る。

心から心にものを思はせて、

身をくるしむる我身なりけり。

とは是れ西行が述懐にして、彼が如き悟脱の域にあらざれば、殆ん

と道破し能はざるの高調なり。

足利義昭が湖に浮んで、轉た人事の意の如くならざるを慨き、流離の歎を發して、

落○魄○江○湖○暗○結○愁、孤○舟○一○夜○思○悠○々、
天○公○又○慰○吾○生○否、月○白○蘆○花○淺○水○秋。

の悲調を讀んでは、誰か一滴の涙を惜むものあらん。

平重衡關東にて斬られける折、

燈○暗○數○行○虞○氏○淚、夜○深○四○面○楚○歌○聲。

と詠せりしは、從容死に就くの覺悟は定めながらも、ほの暗き帳中に、止めあへぬ暗涙をしぼり、妓千壽と別れを惜しむの情見えて哀れ深し。

楠正行が帝に拜謁しけるととき、辨の内侍を賜はらんとありければ、

正行とりあへず、

とても世にながらふべくもあらぬ身の、

かりの契りをいかで結ばん。

と奏して辭しにけり。人々後に思ひ合はされて袂をしほりけるなり。

死○去○預○期○葬○首○陽○、百○年○身○世○劍○鋒○霜○、

睡○醒○窓○底○尋○殘○夢○、曉○月○光○寒○頭○斷○場○。

とは是れ宮本茶村が、赤沼の獄中に在りたる時の作なり。

筆底鬼哭の啾々たるものあるを覺ゆ。

所謂壯烈人を泣かしむとは斯る類をや言ふならん。

之にて思ひ起すは、太田道灌が死に臨みて、

かゝる時さころ命のをしからめ、

かねてなき身と思ひしらすば。

平生の心事斯かりけるかと、轉た讀む人をして三歎せしむるものあり。

男子四方に志す、膽は大なるを要す。誰か

從○是○五○萬○三○千○里○、

北○辰○直○下○建○銅○標○。

の句を讀んで、大呼案を拍て千古の快事を叫ばざるものあらん。

又誰やらの句に、

滿○天○飛○雪○紛○々○夜○、

將○軍○墓○前○策○縱○橫○。

滿懷の氣意斗牛を壓するの快文字たらずんばあらず。

又景を寫して、畫も成り難きの妙を極むるは、北村季吟の

もしはたく浪華の海の八重霞、

一重は蟹がしわざなりけり。

優にやさしきは白河樂翁が夕顔の歌に、

心あてに見し夕顔の花ちりて、

たつねぞわふる江らがれの宿。

これより人樂翁を稱して、たろがれの少將と云ひけり。



天然の聲

終

明治三十三年六月十二日印刷
全 三十三年六月十五日發行

定價金三拾錢

著者

鈴木壽傳次

東京市神田區錦町一丁目十番地

發行者

大月隆

東京市神田區錦町一丁目十番地

著作
所權有

印刷者

長谷川辰二郎

東京市神田區錦町三丁目一番地

印刷所

同志社

東京市神田區錦町

發兌元

東京市神田區錦
町一丁目十番地

文學同志會

●文學同志會出版書籍目錄●

大坂備後町四丁目 盛文館
 東京神田區雉子町 山本鏢藏
 東京々弓橋町 松村三松堂

美

妙

春は花夏は螢秋の虫の聲冬の雪是等を始めとして人生の美貌鳥獸の
 艶ある事及の音楽より來る美如何に人生に快樂を與ふる賜なるか本
 書を繙くときは幽谷の鰐魚又飛止の妙美あり

定價 二十錢
 郵稅 二錢

文學の調和

定價 二十五錢
 郵稅 四錢

國異れば各々異りたる所の事情あり異なる事情より各々殊別の文學を

生むはれ一般の通理なり然し深く深究し來れば皆一に歸するものなり
 本書は各國文學の異なる處を示し長短の意見を示し如何にして其調
 和均一の點に達すへきかを詳論せり

人生の目的

定價二十五錢
 郵稅四錢

●第一章緒論 ●第二章飲食主義 ●第三章勤勞主義 ●第四章競爭主義
 ●第五章知識主義 ●第六章良心主義 ●第七章忠孝主義 ●第八章幸福
 釋義 ●第九章自愛主義 ●第十章他愛主義 ●第十一章兼愛主義 ●第十
 二章保存主義 ●第十三章飲食主義批評 ●第十四章勤勞主義批評 ●第十
 十五章競爭主義批評 ●第十六章知識主義批評 ●第十七章良心主義批評 ●第十
 八章忠孝主義批評 ●第十九章自愛主義批評 ●第二十章他愛主義批評 ●第
 二十一章兼愛主義批評 ●第二十二章保存主義批評 ●第二十三章結論

人生の老旅

定價二十錢
 郵稅四錢

世に不幸の人多しと雖も己のが涙の洩し場なき人はと苦痛の人はあ

らざるべし人生の老旅は是等の人の情友となり人なき處に於て深く
 兄弟に同情を表し其煩悶を慰むべし
 本書は人生の初旅の後篇なり初旅を讀む人は必ず後篇を讀まざるべ
 からず

婦人實務錄

定價十六錢
 郵稅二錢

此書は議論にあらず婦人の實際毎日に心得ざるを得ざる教訓心得方
 針を信切に説き苟も婦人として心得ざるを得ざる案内書也

人生の初旅

定價二十錢
 郵稅四錢

人の一生中には如何なる事が起るか如何に歩まざる可からざるか如
 何にせば立身すべきか如何なる人が失敗せしか本書は未開快絶の實
 行録なり詩文あり散文あり小説あり議論あり先づ一生涯の記録と思
 ふて可なり

家の寶全

定價三十錢
 郵稅六錢

本書は文學會の方針とする家制部發表の書にして各專門大家の家制
意見及び家に起る萬般の事業方法を教へ其項目を五百有餘あり
廿八年初版を起し今廿三版を重ね部數二十七万部を發賣せる書なり
手に取りて其價額を知れ始は二冊なりしが今は合本なり

四

馬琴妙文集

定價 二十錢
郵稅 四錢

詩文散文序文末文碑文箴文戲曲座銘等馬琴全著述中の粹を集めたるもなり

立身事蹟

定價 二十錢
郵稅 四錢

世には失策を以て充たせり失策せぬ先に失策に陥らざる方法を講ず
るは立身の急務なるべく古今の聖賢と座右に立談し彼等が失策と成
効の事蹟を尋ね本書を友とするもの立身せざんと欲するも豈得べけんや

山高水長

定價 二十錢
郵稅 四錢

語らんと欲する事を語らずして人に知らしめ言はんと欲する事を口に
明かに言はずして其言聲の美を知らしむ是れ新体詩の特色なりと
す坐ながら天地の怪美を味はんと欲するものは山高水長の傍に來れ

斷巖絕壁

定價 三十錢
郵稅 四錢

文天祥正氣の歌を始めとして和漢の文粹を集めたるものにして今回
本會に於て出版せり盛夏綠蔭の下本書を繙かば心神自ら清涼に浴す
るの感あらん

人生の瀧力

定價 廿五錢
郵稅 四錢

船舶波を犯して走るは蒸力の勢力あるを以てなり社會の迫害を排し
て能く身の全安を圖らんとせば須らく呑海の氣力は養はざるへから
ず本書は即ち吾人の蒸氣力也

吾人之生活

定價 卅五錢
郵稅 四錢

五

本書は文明の生活なり内地雜居後の生活なり日本人としては文明的
 社交を知らんと欲せば本書の他に其友なし

六

風月萬象

定價 三十五錢
 郵稅 六錢

松風吟月

定價 三十錢
 郵稅 六錢

人生の片影

定價 二十錢
 郵稅 二錢

鴨長明海道記

定價 十五錢

廻國雜記

定價 二十錢

人生の悔悟

定價 二十錢
 郵稅 四錢

●父母に別れし悔悟 ●婚入りをしし悔悟 ●學問を學びし悔悟 ●物を
 輕信せし悔悟 ●都會の飲食物 ●人を信用せし悔悟 ●正直の悔悟 ●交
 際を擴めし悔悟 ●望の悔悟 ●一期の失望 ●二期の失望 ●三期の失望 ●
 ●四期の失望 ●都會にありし人の悔悟 ●富家に生れし人の悔悟 ●身
 間を徒費せし悔悟 ●物に溺れし悔悟 ●喫煙を始めし悔悟 ●身を虛弱
 にせし悔悟

禪學斷片

定價 二十錢
 郵稅 四錢

艷麗文粹

定價 二十錢
 郵稅 四錢

万情万眉

定價 二十五錢
 郵稅 四錢

七

研學の順序

郵定 稅價 金貳拾錢

○目次 ○學問の活用 ○政府と學問の保護 ○帝都學生の成否 ○學問の志望の
秘訣 ●學問の玄妙は專修の自然 ●貧富と學問の成否 ●學生と志望の
遠大 ●分陰と愛惜 ●書中の要と摘記 ●誠意專心 ●學科の旨及び其選擇
好 ●書の良否と注意 ●天才を恃むべからず ○諸學科の旨及び其選擇
●法律學 ●政治學 ●經濟學 ●哲學 ●論理學 ●地文學 ●天文學 ●適合 ○生理
學 ●動植物學 ●金石學 ●博言學 ●文學 ●歷史學 ●地文學 ●天文學 ●適合 ○生理
の體格 ○適合 ○時勢と適合 ○境遇と適合 ○嗜好 ○學問 ○適合 ○價值 ○女子教育
剛毅 ○自助心 ●果斷の明 ●注意心の養成 ○嗜好 ○學問 ○適合 ○價值 ○女子教育
一期二期三期

聖僧道元

郵定 稅價 金貳拾錢

○道元系統 ○前是 ○經歷 ○彼の幼時 ○出離解脫 ○渡唐 ○歸朝後の彼
○彼の生涯 ○鎌倉時代と禪宗怨役の理想 ○無常觀 ●厭世と天 ○宗教
家としての道元 ○晩年と涅槃 ○附錄 傘松道詠

特約大賣捌所

鹿兒島	久留米	博多	熊本	佐賀	松山	丸龜	廣島	秋田	大津	濱松	靜岡	名古屋	水戸	
吉田幸兵衛	菊竹書店	森岡書店	芹川書店	大坪萬六	向井藏次郎	鹽田書店	清水庫三郎	成見清兵衛	古川伊助	谷川島屋	内田仙藏	川瀬代助	市毛淺太郎	
長崎	大分	熊本	熊本	佐賀	馬關	高松	諏訪	岡山	姫路	京都	掛川	沼津	弘前	仙臺
安中半三郎	甲斐治平	中山知新堂	河内庄助	上野書店	龜山友堂	日新堂	竹内彌三郎	木村治郎	河合文港	三原堂	文林堂	今泉書閣	有泉書閣	

八ノ戸 宮崎 豊橋 前橋 朽木 岩代郡山 岩代若松 武生 成田 長野 明石 台中 台北

伊吉書店 津野融貫堂 文海卷三堂 万川庸三郎 宮川文三郎 博井陽文堂 荒井陽文堂 西村書店 田中書店 金華書堂 福井書店 棚邊書店 石田書店 博文堂

越後新井 太田 高崎 足利 宇都宮 岩代郡山 福島 福井 札幌 同幌 臺中 台北 台南

文進堂 本宮 喜田 喜久 三泉堂支店 内田濱吉 虎屋忠左衛門 博向堂 平澤潤助 富貴堂 藥師寺書房 丸野書房 城谷書店 龍泉堂

